

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 『完成せるヨーガの環』(Nisṅpannayogāvalī) 第21章「法界語自在マンドラ」訳およびテキスト

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 雅秀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003721">https://doi.org/10.15021/00003721</a>

## 『完成せるヨーガの環』 (*Niṣpannayogāvalī*)

### 第21章「法界語自在マンダラ」訳およびテキスト

森 雅 秀

インド仏教の伝統を受け継いだネパールとチベットにおいて広く流行した法界語自在マンダラ（以下、法界マンダラと略す）は、二百余りの神がみによって構成されるきわめて規模の大きなマンダラである。法界マンダラには、仏、菩薩、女尊、護方神、雑神、群小神といった仏教パントエオンのあらゆるヒエラルキーに属する神がみが登場し、ヨーガ・タントラのマンダラの集大成であるとされる<sup>1)</sup>。マンダラの全体は第一重から第四重までの四つの部分からなり、「法界の言葉に自在なるもの」という別名を持つ文殊を中心とした同心円的な構造を持つ。内マンダラと呼ばれる第一重には、ヨーガ・タントラの代表的なマンダラである金剛界マンダラの神がみがおもに配され、第二重には大乘仏教の重要な教理や概念が尊格化された女尊が並ぶ。第三重には、伝統的な菩薩が四方を囲むが、その多くも金剛界マンダラの中に見いだせる。さらに第三重には四門と四維、そして上下の十方にマンダラを護衛する護方神が位置している。最外周の第四重は金剛族マンダラと呼ばれ、ヒンドゥー教の神がみ、龍王、阿修羅、夜叉、星宿神などの、仏教パントエオンの中で下層に位置づけられる神がみが、文殊への帰依者として置かれている。

法界マンダラは、文殊を賞賛する内容を持つ経典『文殊室利真実名経』 *Mañjuśrī-nāmasaṃgī* の第四章にもとづくマンダラであるといわれる<sup>2)</sup>。しかし、この章はわずかに三偈で終わっており、具体的なマンダラへの言及は含まれていない。そのため、マンダラを構成する個々の神がみの名や位置、図像学的な特徴などは注釈者たちの手にゆだねなければならなかった。このうち、インド、及びチベット、ネパール

1) 仏教パントエオンのヒエラルキーについては [立川 1987b: 344-347] 参照。法界マンダラについては [MALLMANN 1964: 101-183] (NPY の仏訳を含む) [清水 1983] (NPY の和訳を含む) [立川 1987a: 164-170] [田中 1987: 177-180] 参照。[MALLMANN 1964] は、特に各尊の図像学的特徴に詳しい。法界マンダラの作例は [RAGHU VIRA and LOKESH CHANDRA 1967a: No. 21; 1967b: No. 40] [加藤・松長 1981: 45-47] [BOD NAMS RGYA MTHSO 1983: No. 41] [加藤・小林 1985: 21, 37-45, 47] 参照。

2) [WAYMAN 1985: 27-28]

の法界マンダラの規範となった文献は、マンジュシュリーキールティ Mañjuśrīkīrti の『虚空のごとく無垢にして清浄なる法界の智の源』*Gaganāmalasūparīśuddhadharmadhātujñānagarbha* (GGN) である。残念ながらこの文献のサンスクリット原典は発見されていないが、チベット訳がチベット大蔵経に収められている。この GGN にもとづいて法界マンダラの観想法を著したのが、著名な仏教学者アバヤーカラグプタ Abhayākara Gupta (11–12世紀) である。アバヤーカラグプタの代表的な著作のひとつ『完成せるヨーガの環』*Niṣpannayogāvalī* (NPY) は26種類のマンダラの観想法を解説した文献であるが、その第21章「法界語自在マンダラ」は、中尊の文殊から始まり、最外周に至るまでの神がみの図像学的な特徴をひとつひとつあげている。以下に行ったのは、この章の全訳である。NPY と GGN を比較してみると、全体的にはほぼ一致しているが、身色や持物をはじめ尊名、位置、全体の尊格数に若干の相違があることが知られる。また、NPY と関係の深い文献に『金剛阿闍梨所作集』*Vajrācāryakriyāsamuccaya* (ACR) があるが、ここに含まれる法界マンダラの解説は NPY のそれとほとんど同一の内容を持ち、いずれかが他方の典拠になったと考えられる。なお、アバヤーカラグプタには NPY の他に僧院内の儀式を解説した『ヴァジュラーヴァリー』*Vajrāvalī* (VA) が代表作として知られているが、ACR は VA とも密接な関係がある。

仏教はアバヤーカラグプタの活躍した時代のおよそ一世紀後にインドから姿を消すが、その伝統はおもにチベットで継承された。法界マンダラに関しては、パンチェンラマ一世 Pan chen blo bzang chos kyi rgyal mtshan (16–17世紀) が NPY の26種類のマンダラを45種類に増補し、その観想法を著したが、法界マンダラもその中に含まれている。また、17世紀にはチャンキャ・ガワン・ロサン・チューデン Lchang skya ngag dbang blo bzang chos ldan が NPY と VA の注釈書を著し、法界マンダラにも多くの紙幅をさいている。これらを見ると、NPY の伝承がチベットにおいてもよく保たれていたことが知られる。一方、チベット仏教の最大の学者のひとりであるプトン・リンチェントップ Bu ston rin chen grub (13–14世紀) は、直接 GGN にもとづいて、『法界語自在マンダラに関する儀軌<賢者の宴>』*Chos kyi dbyings gsung gi dbang phyug gyi cho ga, Mkhas pa'i dga' ston* を著した。これは後に、ジャムヤン・ロテル・ワンポ 'Jam dbyang blo grer dbang po (1847–1914) らによって集大成されたマンダラ理論書『タントラ部集成』*rGyud sde kun btus* においても援用されている。このように、法界マンダラの伝承はいずれも GGN を始まりとするが、チベットでは、GGN に直接もとづくものと、すでにインドで GGN を参照して著

された NPY にもとづくものの二派があったことが知られる。

NPY のサンスクリット校訂本は1949年に Benoytosh Bhattacharyya によって発表された。同書は三種類の写本にもとづいて校訂され、詳細な解説と尊名の索引を含み、長い間、仏教図像学の基本的な文献資料としての位置を占めていた。しかし、使用されている写本の不備、当時の時代的な制約などのため、昨今の研究水準からみて文献学的にも図像学的にも満足できるものではなかった。今回、新たに四種類のサンスクリット写本をもとにチベット訳テキストを参照しつつ校訂を進め和訳を行った。各テキスト、及び校訂、和訳に際して使用した参考文献は以下の略号に列挙した。またそれらの該当箇所は凡例に記した。

## 略号

ACR: *Vajrācāryakriyāsamuccaya*.

AS<sub>1</sub>: Jagaddarpaṇa, *Vajrācāryakriyāsamuccaya* [LOKESH CHANDRA 1977a].

AS<sub>2</sub>: —, — (東京大学図書館所蔵サンスクリット写本 [MATSUNAMI 1965: No. 111]).

AT<sub>1</sub>: Avadhūtipa dpalldan 'gro ba'i me long (Avadhūta Sṛimaj Jagaddarpaṇa), *Rdo rje slob dpon gyi bya ba kun las btus pa* (*Vajrācāryakriyāsamuccaya*), TTP, Vol. 86, No. 5012, 222, 5, 7–322, 1, 5.

GDK: [JAM DBYANG BLO GTER DBANG PO 1971].

GGN: 'Jam dbyang grags pa (Mañjuśrīkīrti), *Nam mkha' dri ma med pa shin tu yougs su dag pa chos kyi dbyings kyi ye shes kyi snying po* (*Gaganāmalasūpariśuddhadharmadhātujñānagarbha*), TTP, Vol. 75, No. 3416, 192, 1, 4–222, 4, 7.

NG: Abhayākara Gupta, *Niṣpannayogāvalī* [BHATTACHARYYA 1972].

NPY: *Niṣpannayogāvalī*.

NS<sub>1</sub>: Abhayākara Gupta, *Niṣpannayogāvalī* (東京大学図書館所蔵サンスクリット写本 [MATSUNAMI 1965: No. 215]).

NS<sub>2</sub>: —, — (同上 [MATSUNAMI 1965: No. 216]).

NS<sub>3</sub>: —, — (同上 [MATSUNAMI 1965: No. 217]).

NS<sub>4</sub>: —, — (個人蔵サンスクリット写本).

NT<sub>1</sub>: 'Jigs med 'byung gnas sbas pa (Abhayākara Gupta), *Rdzogs pa'i rnal 'byor gyi phreng ba* (*Niṣpannayogāvalī*), TTP, Vol. 80, No. 3962, 126, 3, 4–154, 2, 8.

NT<sub>2</sub>: —, — (デルゲ版チベット大蔵経 No. 3141, 1167, 5–1280, 7.)

NT<sub>3</sub>: —, — (東洋文庫所蔵ナルタン版チベット大蔵経 No. 1957, thu109a, 6–175a, 2).

NT<sub>4</sub>: —, *Dpal 'jam pa'i rdo rje mngon par rtogs pa kun las btus pa rdzogs pa'i rnal 'byor gyi phreng ba* (*Sṛīmañjuvajrādīkramābhisamayāsamuccayanīṣpannayogāvalī*), TTP, Vol. 87, No. 5023, 47, 5, 6–77, 4, 5.

Skt.: Sanskrit.

Tib.: Tibetan.

TTP: *Tibetan Tripiṭaka, the Peking Edition*, Suzuki Foundation, (『影印北京版西藏大蔵経』鈴木学術財団).

VA: *Vajrāvalī*.

VS<sub>1</sub>: Abhayākara Gupta, *Vajrāvalī* [LOKESH CHANDRA 1977b]).

VS<sub>2</sub>: —, — (東京大学図書館所蔵サンスクリット写本 [MATSUNAMI 1965: No. 350]).

VS<sub>3</sub>: —, — (同上 [MATSUNAMI 1965: No. 351]).

VT<sub>1</sub>: 'Jigs med 'byung gnas sbas pa (Abhayākara Gupta), *Dkyil 'khor gyi cho ga rdo rje phreng ba* (*Vajrāvalī nāma maṅḍloḥāyikā*), TTP, Vol. 80, No. 3961. 79, 1, 1-126, 3, 4.

VT<sub>2</sub>: —, — (デルゲ版チベット大蔵経 No. 3140, 981, 1-1167, 3).

VT<sub>3</sub>: —, — (東洋文庫所蔵ナルタン版チベット大蔵経 No. 1956 thula, 1-109a, 6).

清水: [清水 1983]

チャンキャ: [NGAG DBANG BLO BZANG CHOS LDAN 1957a]

パンチェン: [PAN CHEN BLO BZANG CHOS KYI RGYAL MTSHAN 1973]

プトン: [LOKESH CHANDRA 1969]

- \* NS は NPY のすべてのサンスクリット・テキスト (NG を除く) を, NT は NPY のすべてのチベット訳テキストを表す。また NS<sub>1,3</sub> は NS<sub>1</sub>, NS<sub>3</sub> を, NS<sub>1-3</sub> は NS<sub>1</sub>, NS<sub>2</sub>, NS<sub>3</sub> を表す。他もこれに従う。
- \* NS<sub>155a, 1</sub> は NS<sub>1</sub> の第55葉表面1行目を表す。NT<sub>1141, 3, 8</sub> は NT<sub>1</sub> (TTP, Vol. 80) の141頁第3葉8行目を表す。
- \* デルゲ版チベット大蔵経は次のテキストを使用した。  
*The Nyingma Edition of the sDe-dge bKa'-gyur and bsTan-'gyur sponsored by The Head Lama of the Tibetan Nyingma Meditation Center* Vol. 61. Oakland: Dharma Publishing.

## 凡 例

- ① 和訳は NG [BHATTACHARYYA 1972: 54-65] をサンスクリット・テキストの底本とし, NS<sub>155a, 1-66b, 4</sub>; NS<sub>278b, 1-96b, 1</sub>; NS<sub>366b, 2-82a, 2</sub>; NS<sub>462a, 5-77b, 5</sub> を参照して行った。
- ② チベット訳テキストは NT<sub>1141, 3, 8-145, 2, 2</sub>; NT<sub>21228, 5-1244, 1</sub>; NT<sub>3thu144b, 1-153a, 5</sub>, および NT<sub>464, 2, 7-68, 1, 8</sub> を参照した。このうちはじめの三本は同一の訳者によるものである。NT<sub>4</sub> は北京版にのみ含まれる訳本で, 訳出時期は他の三本に先行する。サンスクリット・テキストははじめの三本によく対応する。
- ③ ACRの一部は NPY 全体とほとんど一致する。第21章に関しては AS<sub>1232, 1-248, 2</sub>; AS<sub>2140b, 7-150a, 3</sub> がその該当箇所であり, 和訳に際しては NPY のサンスクリット・テキストに準ずる扱いをした。ACR のチベット訳テキストは北京版のみ参照した (AT<sub>1272, 4, 4-275, 4, 8</sub>)。
- ④ NPY に対する注釈書としてパンチェン一世 94, 5-111, 3; チャンキャ 12, 4, 6-18, 5, 1 を参照した。また, GGN<sub>192, 4, 3-196, 5, 1</sub>; プトン 338, 4-359, 7; GDK<sub>457, 2-481, 6</sub> も参照した。NPY とこれらのテキストの間の異同は註に示した。ただし, プトンと GDK に関しては, GGN に一致する場合註記は省略した。
- ⑤ 第三重までの和訳 [清水 1983: 100-123] と, 仏訳 [MALLMANN 1964: 82-97] もあわせて参照した。
- ⑥ 内容の理解をはかるために ( ) 内に説明の語句, 原語などを入れた。ただし, 固有名詞の原語には ( ) を省略し, 一字目を大文字にした。また, 内容に応じて段落を分け, 見出しをつけた。翻訳上補った語句は [ ] 内に入れた。
- ⑦ 尊名のあとの番号は諸尊リストの番号に対応する。

## 訳

### 0. 場の設定<sup>1)</sup>

法界語自在マンダラについて述べる。前章の文殊金剛マンダラのように金剛籠などの観想を行い<sup>2)</sup>、ヤマーンタカ *Yamāntaka* を始めとする十忿怒尊<sup>3)</sup> を観想する。ただし、この場合、後述する姿を観想する<sup>4)</sup>。このマンダラには仏塔は存在しない<sup>5)</sup>。

### 1. 第一重

#### 1.1 中尊

楼閣の中心には二重蓮華<sup>6)</sup> (*viśvapaḍma*) の花卉に獅子が乗り、その上の二重蓮華と月輪の上にマンジュゴーシャ(1)がいる。金剛結跏趺坐<sup>7)</sup> (*vajraparyāṅka*) をくみ、朝日のように輝く。身色は黄金色<sup>8)</sup>、サファイアを頂につけた美しい髻を結び、金剛杵、宝、蓮華、二重金剛 (*viśvavajra*) の鬘冠<sup>9)</sup> の上に五仏の宝冠をいただく。さまざまな宝石、装身具、衣装を身に付け、恋情のラサ<sup>10)</sup> (*rasa*) にあふれる<sup>11)</sup>。中央、右、後ろ、左の面は順に黄色、青、赤、白である。八臂をそなえ、二臂で転法輪印を示し、右手には剣、矢、金剛杵を、左手には般若経の経函、弓、金剛鈴を持つ<sup>12)</sup>。

#### 1.2 八仏頂

八葉蓮弁にすわる獅子の上の二重蓮華と月輪には、東方を始めとする四方に大仏頂(2)、白傘蓋仏頂(3)、光聚仏頂<sup>13)</sup>(4)、最勝仏頂(5)が、また北東を始めとする四維には捨除仏頂<sup>14)</sup>(6)、高仏頂(7)、高大仏頂(8)、勝仏頂<sup>15)</sup>(9)がいる。これらの八仏頂は金剛結跏趺坐をくみ、宝冠を付ける。身色は黄色、二臂で、右手は輪を持ち上げ<sup>16)</sup>、左手で各自の座を抑える<sup>17)</sup>。

#### 1.3 四仏と十六菩薩

##### 1.3.1 東院

次に、東院の中央には象王に乗る阿闍(10)がいる。身色は青、四面をそなえる。中央の面は青く、忿怒を伴った恋情ラサを有する。右面は白光色で口を開いた憤激ラサ、後ろの面は黄色で勇猛ラサをそれぞれそなえ、左面は赤で牙をむき下唇を抑える<sup>18)</sup>。八臂で、右手には剣、金剛杵、矢、鉤を持ち、左手は第一臂でタルジャーニ<sup>19)</sup> (*tarjani*)

を示し、残りの手には金剛鈴、弓、羂索を持つ。金剛薩埵(11)、金剛王(12)、金剛愛(13)、金剛喜(14)によって囲まれる。

### 1.3.2 南院

南院の中央には馬王<sup>20)</sup>に乗る宝生(15)がいる。身色は黄色、[中央、右、後ろ、左の順に]黄色、黒<sup>21)</sup>、白、赤の四面を有する。八臂で右手には金剛杵、劍、矢、鉤を<sup>22)</sup>、左手には如意宝幢(如意宝珠の付いた幢)、金剛鈴、羂索、弓<sup>23)</sup>を持ち、金剛宝(16)、金剛光(17)、金剛幢(18)、金剛笑(19)によって囲まれる。

### 1.3.3 西院

西院の中央に孔雀に乗る阿弥陀(20)がいる。身色は赤で<sup>24)</sup>、赤、黒、白、黄色の四面を持ち、八臂である。右手には金剛杵、矢、劍、鉤を、左手には蓮華、弓、羂索、鈴を持つ。金剛法(21)、金剛利(22)、金剛因(23)、金剛語<sup>25)</sup>(24)によって囲まれる。

### 1.3.4 北院

北院の中央にはガルダ鳥<sup>26)</sup>に乗る不空成就(25)がいる。身色は緑で四面を有する。中央の面は緑で牙をむき、右の面は黄色<sup>27)</sup>で寂靜のラサ<sup>28)</sup>を、後ろの面は赤で恋情のラサを、左の面は白で寂靜のラサをそなえる。八臂を有し、右手には劍、金剛杵、矢、鉤を持ち、左手は第一臂でタルジャーニーを示し、残りの手には鈴、弓<sup>29)</sup>、羂索を持つ。金剛業(26)、金剛護(27)、金剛牙(28)、金剛拳(29)によって囲まれる。

### 1.3.5 まとめ

阿閼をはじめとする四如来は、各自の乗り物<sup>30)</sup>の上にある二重蓮華<sup>31)</sup>と日輪の上に金剛結跏趺坐で座り、さまざまな宝石、装身具、衣装を身につけ、宝冠<sup>32)</sup>をいただく<sup>33)</sup>。一方、金剛薩埵等の十六菩薩は[各院の]北東をはじめとする四維にある<sup>34)</sup>二重蓮華と月輪の上に、金剛界マンダラ<sup>35)</sup>で説いた姿で住する<sup>36)</sup>。これに関しては[各院の]四方に住するという説もある<sup>37)</sup>。

## 1.4 四 妃

北東をはじめとする四維の<sup>38)</sup>二重蓮華と月輪の上に、薩埵跏趺坐<sup>39)</sup>(*sattvapary-añka*)を組むローチャナー(30)、マーマキー(31)、パーンダラー(32)、ターラー<sup>40)</sup>(33)がいる。彼女らは順にマンジュゴーシャ、阿閼、阿弥陀、不空成就と<sup>41)</sup>同じような特徴を持つ。

## 1.5 四 摂 菩 薩

東門には金剛鉤(34)がいる。身色は褐色<sup>42)</sup>、金剛の鉤と羂索を持ち<sup>43)</sup>展右<sup>44)</sup>

(āliḍha) で立つ。

南門には金剛索(35)がいる。身色は黄色、金剛の羂索を持ち<sup>45)</sup>展左<sup>46)</sup> (pratyāliḍha) で立つ。

西門には金剛鎖(36)がいる。身色は赤、金剛の鎖<sup>47)</sup>を持ち、二臂でヴァイシャーカ歩<sup>48)</sup> (vaiśākapaḍa) で立つ。

北門には金剛鈴(37)がいる。身色は緑、金剛縛で金剛鈴<sup>49)</sup>を握り、マンダラ歩<sup>50)</sup> (maṇḍalapada) で立つ。

これらの四尊<sup>51)</sup>は二重蓮華と日輪の上に立ち、二臂、三眼、一面<sup>52)</sup>をそなえ、逆立つ褐色の髪と髭をはやし<sup>53)</sup>、八匹の龍<sup>54)</sup>によって飾られる<sup>55)</sup>。

## 2. 第二重

### 2.1 十二地

次に、内マンダラ(第一重)の外の第二重のマンダラ<sup>56)</sup>には、東方に北東から右廻りに順に十二地<sup>57)</sup>がいる。いずれも二臂で<sup>58)</sup>、右手に金剛杵、左手には各自の持物を持つ。

このうち、はじめは信解行地(38)がいる。身色は蓮華のような赤色、赤蓮華<sup>59)</sup>を持つ。

歓喜地(39)。身色は赤<sup>60)</sup>、如意宝<sup>61)</sup>を持つ。

離垢地(40)。身色は白<sup>62)</sup>、白蓮を持つ。

発光地(41)。身色は赤<sup>63)</sup>、日輪<sup>64)</sup>をのせた二重蓮華を持つ<sup>65)</sup>。

焰慧地(42)。身色は緑宝 (marakata; エメラルド) のような色<sup>66)</sup>、青い睡蓮を持つ。

難勝地(43)。身色は黄色、手を上向きにひざに置き<sup>67)</sup>、緑宝を持つ。

現前地(44)。身色は金色、般若経の経函をのせた蓮華を持つ<sup>68)</sup>。

遠行地(45)。身色は紺色、二重金剛をのせた二重蓮華<sup>69)</sup>を持つ。

不動地(46)。仲秋の月の輝きを有し<sup>70)</sup>、月の上に赤い五鈷杵<sup>71)</sup>をのせた蓮華<sup>72)</sup>の茎を誇らしげに<sup>73)</sup>持つ。

善慧地(47)。身色は白<sup>74)</sup>、剣をのせた睡蓮を持つ。

法雲地(48)。身色は黄色、法雲で覆われた般若経の経函を持つ。

善光地<sup>75)</sup>(49)。身色は真昼の太陽のような色<sup>76)</sup>、正等覚を示す無量光<sup>77)</sup>の仏像<sup>78)</sup>をのせた蓮華を持つ<sup>79)</sup>。



## 2.2 十二波羅蜜

南には<sup>80)</sup>十二波羅蜜がいる。いずれも二臂で、右手には如意宝<sup>81)</sup>、左手には各自の持物を持つ。ただし般若波羅蜜はさらに二臂を持つ<sup>82)</sup>。

このうち、はじめは宝蓮華波羅蜜(50)がいる。身色は赤、月輪をのせた蓮華を持つ。布施波羅蜜(51)。身色は白みをおびた赤、さまざまな穀物の穂<sup>83)</sup>を持つ。

持戒波羅蜜(52)。身色は白、つぼみの付いたアショーカー(無憂)樹の花の房<sup>84)</sup>を手にする。

忍辱波羅蜜(53)。身色は黄色、白い蓮華を持つ。

精進波羅蜜(54)。身色は緑宝色、青い睡蓮<sup>85)</sup>を持つ。

禪定波羅蜜(55)。身色は紺色、白い蓮華を手にする。

般若波羅蜜(56)。身色は美しく輝く黄金色<sup>86)</sup>。般若経の経函を上のにのせた蓮華を持つ。さらに二臂で転宝輪印を結ぶ<sup>87)</sup>。

方便波羅蜜(57)。身色はプリヤング<sup>88)</sup>のような緑色、金剛杵<sup>89)</sup>を上のにのせた黄色い蓮華<sup>90)</sup>を持つ。

願波羅蜜(58)。身色は青い睡蓮のような色<sup>91)</sup>、剣を上のにのせた青い睡蓮を持つ。

力波羅蜜(59)。身色は赤、般若経の経函を持つ。

智波羅蜜(60)。身色は白、さまざまな果実<sup>92)</sup>で飾られた菩提樹の枝を持つ。

金剛業波羅蜜<sup>93)</sup>(61)。身色はさまざまな色、二重金剛杵を上のにのせた青い睡蓮を持つ。

## 2.3 十二自在

西方には<sup>94)</sup>十二自在<sup>95)</sup>がいる。いずれも二臂で、右手には蓮華<sup>96)</sup>、左手には誇らしげに各自の持物を持つ。

命自在(62)がいる。身色は白みをおびた赤<sup>97)</sup>、ルビー(padmarāga)の上に坐し禅定印を結ぶ無量寿<sup>98)</sup>の仏像を持つ。

心自在(63)。身色は白、赤い五鈷金剛杵を持つ<sup>99)</sup>。

財自在(64)。身色は黄色、如意宝幢を持つ。

業自在(65)。身色は緑、二重金剛杵を持つ。

生自在(66)。身色はさまざまな色<sup>100)</sup>、さまざまな色のジャーティの枝<sup>101)</sup>を手にする。

神通自在(67)。身色は空のような紺色<sup>102)</sup>、日輪と月輪を上のにのせた蓮華を持つ<sup>103)</sup>。

勝解自在(68)。身色は蓮の根<sup>104)</sup>のような白、プリヤングの華鬘<sup>105)</sup>を持つ。

願自在(69)。身色は黄色、青い睡蓮を手にする。

智自在(70)。身色は青、剣をのせた青い睡蓮を持つ。

法自在(71)。身色は白みをおびた赤<sup>106</sup>、吉祥の瓶<sup>107</sup>を上へのせた蓮華を持つ<sup>108</sup>。

如是女<sup>109</sup>(72)。身色は白、右手には白い蓮華、左手には金剛と宝の輪<sup>110</sup>を持つ。

仏菩提女(73)。身色は金の溶液のような色、右手には五鈷金剛杵を上へのせた黄色い蓮華、左手には輪をのせた如意宝幢を持つ。

## 2.4 十二陀羅尼

北には十二陀羅尼がいる。いずれも二臂で、右手には二重金剛杵、左手には誇らしげに<sup>111</sup>各自の持物を持つ。

このうちはじめはヴァスマティー<sup>112</sup>(74)がいる。身色は黄色、穀物の穂を持つ。

ラトノールカー(75)。身色は赤、如意宝幢を持つ。

ウシュニーシャヴィジャヤー(76)。身色は白、月長石の瓶を手にする。

マーリーチー(77)。身色は赤みをおびた白、糸のついた針<sup>113</sup>を持つ。

パルナシャバリ(78)。身色は緑色、孔雀の羽根<sup>114</sup>を持つ。

ジャングリー(79)。身色は白、毒の花房を持つ。

アナンタムカー(80)。身色はプリヤングのような緑<sup>115</sup>、不壊の大宝庫である瓶を上へのせた赤い蓮華を手にする<sup>116</sup>。

チュンダー(81)。身色は白、数珠を懸けた水瓶<sup>117</sup> (kamaṇḍalu) を持つ。

プラジュニャーヴァルダニー(82)。身色は白、剣を上へのせた青い睡蓮<sup>118</sup>を持つ。

サルヴァカルマーヴァラナヴィショーダニー(83)。身色は緑、三鈷金剛杵を付けた白みをおびた赤い蓮華<sup>119</sup>を持つ。

アクシャヤジュニャーナカランダー(84)。身色は赤、宝の箱を持つ。

サルヴァブッダダルマコーシャヴァティー(85)。身色は黄色、蓮華の上にさまざまな宝の小箱<sup>120</sup>を持つ。

## 2.5 四 無 礙

東門には法無礙(86)がいる。身色は白みをおびた赤、両手で金剛の鉤と羂索<sup>121</sup>をもつ。

南門には義無礙(87)がいる。身色は緑宝色<sup>122</sup>、左右の手で宝の羂索<sup>123</sup>を持つ。

西門には詞無礙(88)がいる。身色は赤<sup>124</sup>、両手で両端に蓮華の付いた鎖<sup>125</sup>を持つ。

北門には弁無礙(89)がいる。身色は緑宝色のような緑、三鈷金剛杵を付けた金剛鈴

を両手に持つ。

## 2.6 四 供 養 女

南東には喜女<sup>126)</sup>(90)がいる。身色は黄色、両手で誇らしげに二つの金剛杵を持つ。

南西には鬘女(91)がいる。身色は橙色<sup>127)</sup>、両手で宝の環を持つ。

北西には歌女(92)がいる。身色は赤、両手でヴィーナー（琵琶）を演奏する<sup>128)</sup>。

北東には舞女<sup>129)</sup>(93)がいる。身色は緑、三鈷金剛杵と金剛鈴<sup>130)</sup>を両手に持って舞う<sup>131)</sup>。

## 2.7 ま と め

これら信解行地を始めとする女尊たちすべては、種々の宝石で輝く衣装を着け宝冠をいただく<sup>132)</sup>。顔には笑みをたたえ、恋情のラサにあふれ、二重蓮華と月輪の上に薩埵跏趺坐で座る。ただし門衛は日輪の上にいる。あるいは<sup>133)</sup>、これらの門衛も月輪にいるという説もある<sup>134)</sup>。

# 3. 第 三 重

## 3.1 十 六 菩 薩

第三重<sup>135)</sup>には北東から順に<sup>136)</sup>菩薩たちがいる。

### 3.1.1 東

このうち、東の帯には普賢(94)がいる。身色は黄色、右手で与願印 (varadamudrā) を示し、左手には剣をのせた青い睡蓮を持つ。

無尽慧(95)。身色は黄色、右手は剣を持ち、左手は施無畏印 (abhayamudrā) を示しながら<sup>137)</sup> 蓮華を持つ<sup>138)</sup>。

地藏(96)。身色は黄色、右手で触地印 (bhūsparsāsamudrā) を示し、左手に如意樹をのせた蓮華を持つ。

虚空蔵(97)。身色は緑色、右手であらゆる宝<sup>139)</sup>を降らせながら<sup>140)</sup>、左手に如意宝<sup>141)</sup>を持つ。

### 3.1.2 南

南には虚空庫(98)がいる。身色は黄色、右手には如意宝を、左手には吉祥の瓶を下げた如意樹<sup>142)</sup>を持つ。

宝手(99)。身色は緑色，右手は宝を<sup>143)</sup>左手は月輪をのせた蓮華を持つ。

海慧<sup>144)</sup>(100)。身色は白，右手はほら貝を左手は金剛の剣を持つ<sup>145)</sup>。

金剛蔵(101)。身色は青い睡蓮の花弁の色<sup>146)</sup>，右手は金剛杵を左手は十地経の経函を持つ。

### 3.1.3 西

西には観自在(102)がいる。身色は白<sup>147)</sup>，右手では与願印を示し，左手には蓮華<sup>148)</sup>を持つ。

勢至(103)。身色は黄色，右手には剣を，左手には蓮華を持つ。

月光(104)。身色は白，右手には金剛の輪を，左手には月輪をのせた蓮華<sup>149)</sup>を持つ。

網明(105)。身色は白赤色，右手には剣を，左手には日輪をのせた蓮華<sup>150)</sup>を持つ。

### 3.1.4 北

北には無量光(106)がいる。身色は白，右手には二重蓮華<sup>151)</sup>を，左手には水瓶をのせた蓮華を持つ。

弁積(107)。身色は黄色，右手で指をはじき<sup>152)</sup>，左手は剣をのせた蓮華を持つ。

除憂闍(108)。身色はサフランのような色，右手には五钴金剛杵<sup>153)</sup>を，左手には短槍を持つ。

除蓋障(109)。身色は青色，右手には剣を，左手には二重金剛を特徴とする旗<sup>154)</sup>を持つ。

### 3.1.5 まとめ

これらの十六尊は二重蓮華と月輪の上に薩埵跏趺坐で座る。宝冠をいただき<sup>155)</sup>，さまざまな宝石と衣装で飾られる<sup>156)</sup>。一面二臂である。

## 3.2 忿 怒 尊

### 3.2.1 四 方<sup>157)</sup>

東門には水牛の上にヤマーンタカ(110)がいる。身色は黒，鼓腹である。六面，六足<sup>158)</sup>，六臂をそなえる。右手には鉤，剣，矢を持ち，左手は第一臂で羂索を持ちながらタルジャーニーを示し，残りの手には鈴，弓<sup>159)</sup>を持つ。面，足の特徴は前章と同様である<sup>160)</sup>。

南門には<sup>161)</sup>プラジュニャーンタカ(111)がいる。身色は黄色，黄色い四面を持つ。中央の面は恋情のラサ，右の面は大口のラサ<sup>162)</sup>，後ろの面は激しい暴虐のラサ<sup>163)</sup>，左面は寂静のラサをそなえる。あるいは，これらの色は順に黄，青，赤，緑である<sup>164)</sup>。八臂を持ち，右手には羂索，金剛杵，剣，矢を，左手には自分の胸に当てた鉤<sup>165)</sup>，

金剛鈴<sup>166</sup>、短槍、弓を持つ。

西門にはパドマーンタカ(112)がいる。身色は赤<sup>167</sup>、赤い四面を持つ。中央、右、後ろ、左の各面は、順に恋情、暴虐、滑稽、寂靜の各ラサをそなえる。あるいはこれらの面の色は順に赤、黒、黄色、白である。八臂をそなえ、そのうちの左右の二臂で金剛の鎖を持ち、残りの右手には金剛杵、劍、矢を持ち、左手は第一臂に鈴を持ち、第二臂は羂索を持ちながらタルジャーニーを示し、第三臂には弓を持つ<sup>168</sup>。

以上の三尊は遊戯の姿勢で立つ。

北門にはヴィグナーンタカ(113)がいる。身色は青、青い四面を持つ<sup>169</sup>。あるいはこれらの面の色は順に青、黄色、赤、緑である。八臂を持ち、そのうちの左右の二臂は金剛縛<sup>170</sup>で金剛鈴<sup>171</sup>を持つ。残りの右手には劍、矢、鉤を、左手は第一臂で羂索を持ちながらタルジャーニーを示し、第三、第四臂には弓、鈴を持つ。ヴィナーヤカ Vināyaka を展左で踏みつけて立つ。

### 3.2.2 四 維<sup>172</sup>)

北東にはトライローキヤヴィジャヤ(114)がいる。身色は青、青い四面を有する<sup>173</sup>。中央の面は忿怒を伴った恋情、右は暴虐、後ろは勇猛、左は嫌悪の各ラサをそなえる。これらの面の色は、青、黄色、赤、白である<sup>174</sup>。八臂を有し、そのうちの二臂で金剛杵と鈴を持ち胸の前でヴァジュラフーンカーラ印<sup>175</sup> (vajrahūṃkāramudrā) を結ぶ。残りの右手には劍、鉤、矢を、左手には金剛杵<sup>176</sup>、羂索、弓を持つ<sup>177</sup>。展左の姿勢で立ち、左足でマヘーシュヴァラ Maheśvara の頬<sup>178</sup> を、右足でウマー Umā の胸を踏みつける。

南東にはヴァジュラジュヴァーラーナラールカ(115)がいる。身色は黒<sup>179</sup>、恋情、勇猛、嫌悪、慈悲<sup>180</sup>の各ラサをそなえた四面を有する。あるいはまた、これらの面の色は、青、白、黄色、赤である。八臂で、右手には金剛杵、劍、矢、円盤を持ち、左手には鈴、羂索、弓、旗<sup>181</sup>のついたカトヴァーンガ<sup>182</sup>を持つ。妻を伴ったヴィシュヌ Viṣṇu を展右<sup>183</sup>で踏みつけて立つ<sup>184</sup>。

南西にはヘールカヴァジュラ(116)がいる。身色は青で<sup>185</sup>、青い四面を有する。中央の面は暴虐、右は困惑、後ろは暴食<sup>186</sup>、左は恋情をともなった各ラサをそなえる。あるいはまたこれらの面の色は青、赤、緑、白である。八臂で、右手には五鉞金剛杵<sup>187</sup>、矢、血の溢れたカパーラ<sup>188</sup>を、左手は一臂で開いた蓮華を胸に当て、残りの二臂で弓、鈴と旗のついたカトヴァーンガを持ち、左右の二臂でマハーバイラヴァ Mahābhairava (シヴァ)の生皮を外衣<sup>189</sup>のように持つ<sup>190</sup>。妻を伴ったブラフマン Brahman を展左で踏みつけて立つ。

北西にはパラマーシュヴァ(117)がいる。身色は緑色で緑色の四面<sup>191)</sup>を有する<sup>192)</sup>。中央は忿怒を伴った恋情、右は暴虐のラサをそなえ、左はブラフマンのような面相である。あるいはまたこれらの三面の色は緑、青、白である。頭頂には緑色の馬の面がある。八臂で、右の第一臂は二重金剛杵と三本の旗を持ち<sup>193)</sup>直立の形を、第二臂は三本の旗の形をつくり<sup>194)</sup>、残りの二臂には剣と矢を持つ<sup>195)</sup>。左手には楯を持った手で二重蓮華<sup>196)</sup>を、残りの三臂で短槍、杖、弓を持つ。展右と展左の四足を有する<sup>197)</sup>。右の第一足でインドラニー *Indrāṇī* とシュリー<sup>198)</sup> *Srī* を、第二足でラティ *Rati* とプリーティ *Prīti* を、左の第一足でインドラ<sup>199)</sup> *Indra* とマドゥッカラ<sup>200)</sup> *Madhukara* を、第二足でジャヤカラ *Jayakara* とヴァサンタ *Vasanta* を踏んで立つ<sup>201)</sup>。

### 3.2.3 上 下<sup>202)</sup>

マンダラの中尊の上の端にはウシュニーシャチャクラヴァルティン(118)がいる。身色は黄色で黄色の四面を持つ。あるいは、黄色、青、赤、白の四面を持つ。八臂で右手には円盤、鉤、剣、矢を、左手には鈴、羅索、数珠、弓を持つ。遊戯の姿勢で立つ。

中尊の下にはスンバラージャ(119)がいる。身色は黒で<sup>203)</sup>、暴虐、寂靜、滑稽、恋情の各ラサをそなえた黒い四面<sup>204)</sup>を持つ。あるいはまた面の色は黒、白、赤、黄色である。八臂で、右手には金剛杵、鉤、剣、矢を、左手には鈴、羅索、戟、弓を持つ。展左<sup>205)</sup>で立つ。

### 3.2.4 まとめ

これらの十忿怒尊は二重蓮華と日輪の上に立ち、各々の面には赤い三眼<sup>206)</sup>、しかめた眉を有し、虎の生皮の上衣と下衣<sup>207)</sup>、頭蓋骨の環の頭飾をつけ、燃え上がって逆立つ褐色の毛髪を有し、褐色の髭をはやし、八匹の龍王とともに威嚇する<sup>208)</sup>。

## 4.3 八 供 養 女

この第三重の<sup>209)</sup>四維の内側にはトライローキヤヴィジャヤなどの忿怒尊四尊があり、それらの外側の線のさらに外側の南東をはじめとする四維を結ぶ線の右側には華女以下の四尊が、左側には金剛色女以下の四尊がいる<sup>210)</sup>。

このうち[南東には]華女(120)がいる。身色は黄色、手に花の器を持つ。

[南西には]香女(121)がいる。身色は黒<sup>211)</sup>、手に香の容器<sup>212)</sup>を持つ。

[北西には]燈女(122)がいる。身色は赤、宝の燈明の柄<sup>213)</sup>を手にする。

[北東には]塗香女(123)がいる。身色は緑、貝殻でできた塗香の容器<sup>214)</sup>を手にする。

[南東には]金剛色女(124)がいる。身色は黄色、鏡を手にする<sup>215)</sup>。

[南西には]金剛声女(125)がいる。身色は緑、ヴィーナーを手にする<sup>216)</sup>。

[北西には] 金剛味女<sup>217)</sup>(126)がいる。身色は赤、塗香の容器<sup>218)</sup>を手にする。

[北東には] 金剛触女<sup>219)</sup>(127)がいる。身色はさまざまな色<sup>220)</sup>、さまざまな衣<sup>221)</sup>を手にする。

これら八尊は[一面]二臂で宝冠を付け、さまざまな衣裳と宝石<sup>222)</sup>で覆われ、蓮華と月輪の上に<sup>223)</sup>薩埵跏趺坐を組む。

## 4. 第 四 重

### 4.1 護 方 神<sup>224)</sup>

第四の金剛族のマンダラの東方には白象アイラーヴァタ<sup>225)</sup> Airāvata に乗ったインドラ(128)がいる。身色は黄色、右手に金剛杵を持ち、左手で明妃の乳房を触る<sup>226)</sup>。

南には水牛の上にヤマ(129)がいる。身色は黒<sup>227)</sup>、杖と戟を持つ。

西にはマカラ(海獣)の上にヴァルナ(130)がいる。身色は白、七匹の龍でできた傘蓋を有し蛇の索とほら貝を持つ<sup>228)</sup>。

北には人間の上にクベーラ(131)がいる。身色は黄色、鉤と棍棒を持つ<sup>229)</sup>。

北東には雄牛に乗ったイーシャーナ(132)がいる。身色は白、三叉戟<sup>230)</sup>とカペーラを手にし、頭蓋骨<sup>231)</sup>と半月で鬘を飾り、肩から蛇の聖紐をかけ首が青い<sup>232)</sup>。

南東には山羊の上にアグニ(133)がいる。身色は赤で杓と水瓶を持つ<sup>233)</sup>。

南西には羅刹の王ナイルリティ(134)がいる。身色は青、死体の上に乗る。剣と楯を持つ<sup>234)</sup>。

北西には鹿の上にヴァーユ(135)がいる<sup>235)</sup>。身色は青、風の袋を持つ<sup>236)</sup>。

これら八尊は、四臂で右の第一臂に各々の第一の持物を持ち、自分と同じような姿をした明妃を抱いた左の第一臂に第二の持物を持つ。残りの二臂は頭上でマンダラの中尊に向かって合掌する<sup>237)</sup>。

### 4.2 ヒンドゥー教の至高神

イーシャーナの近くの外側に北東から順にブラフマンなどがある。

このうち、ハンサ鳥の上にブラフマン(136)がいる。身色は黄色、四面四臂<sup>238)</sup>、二臂で数珠と蓮華を持ち<sup>239)</sup>、残りの左右の手で合掌しながら<sup>240)</sup>杖と水瓶を持つ。

ガルダ鳥の上にヴィシュヌ(137)がいる。身色は黒で四臂、二臂で円盤とほら貝を持ち<sup>241)</sup>、残りの左右の手で頭上で合掌しながら<sup>242)</sup>棍棒と弓を持つ<sup>243)</sup>。

雄牛の上にマヘーシュヴァラ(138)がいる。身色は白、半月を飾った鬚を結び、四臂、二臂で頭上で合掌し、残りの手で三叉戟とカパーラを持つ<sup>244)</sup>。

孔雀の上にカールティケーヤ(139)がいる<sup>245)</sup>。身色は赤で六面<sup>246)</sup>、右の二臂で短槍と金剛杵を、左の二臂で野鶏と鈴を持ち、残りの二臂で合掌する<sup>247)</sup>。

これらの四尊は前と同様に自分と同じような姿をした明妃を抱く<sup>248)</sup>。

#### 4.3 母 神<sup>249)</sup>

さて次にブラフマーニー(140)がいる。容姿や持物はブラフマンと同様である。

ルドラーニー(141)はルドラと同様である。

ヴァイシュナヴィー(142)はヴィシュヌと同様である<sup>250)</sup>。

カウマリー(143)はカールティケーヤと同様である。

インドラニー(144)はインドラと同様である<sup>251)</sup>。

次にヴァーラーヒー(145)がいる。身色は黒、ふくろう<sup>252)</sup>に乗り、四臂である。左右の手でローヒタ魚とカパーラを持ち、残りの二臂で合掌する<sup>253)</sup>。

死体<sup>254)</sup>の上にはチャームンダー(146)がいる。身色は赤で四臂、左右の手で曲刀(kartri)とカパーラを持ち、残りの手で<sup>255)</sup>合掌する<sup>256)</sup>。

次にプリンギー(147)がいる<sup>257)</sup>。身色は黒でやせている。はじめの二臂で数珠と水瓶を持ち、残りの二臂で合掌する<sup>258)</sup>。

#### 4.4 ガナパティなど

鼠の上にガナパティ(148)がいる。身色は白で象面、蛇の聖紐<sup>259)</sup>を懸け四臂である。右の二臂には三叉戟と甘菓子、左の二臂には斧と大根を持つ<sup>260)</sup>。

マハーカーラ(149)。身色は黒、三叉戟とカパーラを持つ。

ナンディケーシュヴァラ(150)。身色は黒で太鼓に乗る。両手で太鼓を叩く。

#### 4.5 九 星<sup>261)</sup>

七頭立ての馬車の上に日天(151)がいる。身色は赤、左右の手で日輪を乗せた蓮華を持つ。

ハンサ鳥の上に月天(152)がいる。身色は白、左右の手で月輪を乗せた睡蓮を持つ。

山羊の上に<sup>262)</sup>火星(153)がいる。身色は赤、右手に鎌を、食べるような仕草で左手に人頭を持つ。

蓮華の上に水星(154)がいる。身色は黄色、弓矢を持つ。



蛙, もしくはカパーラの上に<sup>263</sup>) 木星(155)がいる。身色は白, 数珠と水瓶を持つ。金星(156)。身色は白で蓮華の上に<sup>264</sup>) 立つ。数珠と水瓶を持つ。

亀の上に土星(157)がいる。身色は黒で, 杖を持つ。

ラーフ(蝕)(158)。身色は赤黒い色, 太陽と月を両手に持つ。

ケートゥ(彗星)(159)。身色は黒, 剣と蛇の索を持つ。

#### 4.6 バラバドラなど

象の上にバラバドラ(160)がいる。身色は白<sup>265</sup>), 剣と鍬を持つ。

コーキラ鳥(kokila)の引く車の上にジャヤカラ(161)がいる。[身色は緑色で<sup>266</sup>] 四臂, 右の二臂に華鬘と矢と, 右の二臂に杯(caṣaka)と弓を持つ<sup>267</sup>)。

おうむの引く車にマドゥカラ(162)がいる。身色は白で四臂, 右の二臂にマカラの幢と矢を, 左の二臂に杯と弓を持つ<sup>268</sup>)。

猿の上にヴェサンタ(163)がいる。身色は白で四臂, 右の二臂に矢と剣を, 左の二臂に弓と杯を持つ<sup>269</sup>)。

#### 4.7 八 龍 王

アナンタ(164), ヴァースキ(165), タクシャカ(166), カルコータカ(167), パドマ(168), マハーパドマ(169), シャンカパーラ(170), クリカ(171)がいる。七匹の龍でできた傘蓋を有し, 合掌する。あるいは, 各自, 父が[右手に]持つ第一の持物<sup>270</sup>)を持って合掌する<sup>271</sup>)。

#### 4.8 八 阿 修 羅

ヴェーマチトリン(172), バリン(173), プラフラーダ<sup>272</sup>) (174), ヴァイローチャナ<sup>273</sup>) (175)等の偉大な阿修羅の王がいる。身色は黒, 甲冑で<sup>274</sup>)武装し, 剣や楯などのさまざまな武器を持つ。

#### 4.9 ガルデーンドラなど

ガルデーンドラ(176)。合掌し, 羽を広げる<sup>275</sup>)。身色は, 足の膝までが白, 膝から臍までが黄色, 臍から首までが赤, 首から頭が黒である。

ドゥルマキンナララージェーンドラ(177)。身色は橙色, ヴィーナーをひく。

パンチャシカ(178)。ガンダルヴァの王であり, 身色は黄色, ヴィーナーをひく<sup>276</sup>)。

サルヴァールタシッタ(179)。呪文(vidyā)を護持するものの王であり, 身色は

白<sup>277</sup>), 華鬘を持つ。

#### 4.10 八 夜 叉

プールナバドラ(180)。青。マーニバドラ(181)。黄色。ダナダ(182)。赤。ヴァイシュラヴァナ(183)。黄色。チヴィクンダリン<sup>278</sup>(184)。赤。ケーリマーリン(185)。緑。スケンドラ(186)。黄色。チャレンドラ(187)。黄色。プールナバドラをはじめとするこれらの夜叉の首領たちはシトロンの実とマンゲースを左右の手に持つ。

#### 4.11 ハーリーティー

ハーリーティー(188)。身色は黄色、穀物を両手に持つ<sup>279</sup>。幼児がいる。

#### 4.12 二 十 八 宿<sup>280</sup>

婁宿<sup>281</sup>(189)。白。胃宿(190)。緑色。昂宿(191)。紺色。畢宿(192)。橙色。觜宿(193)。黒。參宿(194)。黄色。井宿(195)。黄色。鬼宿(196)。紺色。柳宿(197)。白。星宿(198)。黄色。張宿(199)。プリヤングのような緑色。翼宿(200)。金色。軫宿(201)。白。角宿(202)。金色。亢宿(203)。黄色。氐宿(204)。黒。房宿(205)。紺色。心宿(206)。黄色。尾宿(207)。黄色。箕宿(208)。黒。斗宿(209)。黄色がかった白。女宿(210)。白っぽい橙色。虚宿(211)。黒。危宿(212)。黄色。室宿(213)。金色。壁宿(214)。黄色。奎宿(215)。白っぽい橙色。牛宿(216)。紺色。

婁宿をはじめとするこれらの女神たちは、風になびく上衣と下衣をまとい<sup>282</sup>合掌する。あるいはまた、これらの女神たちは車の上に立つと知られている。

#### 4.13 ま と め

シャクラ Śakra (インドラ) を始めとする神がみは蓮華の上に立ち、各自、数えきれないほどの眷族たちに囲まれている。それぞれ、さまざまな衣裳や宝石などによって飾られ、マンダラの中尊である世尊(マンジュゴーシャ)に対し礼拝し、吉祥の頌歌をあらゆる方角に向かって歌う。

#### 4.14 四 摂 菩 薩

東方を始めとする四方の門に金剛鉤<sup>283</sup>等の門衛(217-220)がいる。尊容は中心のマンダラ<sup>284</sup>の四尊と同じである<sup>285</sup>。

## 5. 部族の規定

さて、偉大なヴァイローチャナ *Vairocana* を本質とする世尊マンジュゴーシャ<sup>286)</sup> は清浄なる法界の智恵を自性とし、自らに似た金剛薩埵の印をつける。

大円鏡智をはじめとする四智を順に自性とする阿闍等の四如来<sup>287)</sup> と八仏頂、ローチャナーはマンジュゴーシャの印をつける。

金剛薩埵等の東方の四菩薩、マーマキー、金剛鉤、十二地、法無礙、ラースヤー、普賢等の東方の四菩薩、十忿怒尊、歌女、色女<sup>288)</sup>、そして、第四重の東方<sup>289)</sup> に位置する神がみは阿闍の印をつける。

金剛宝等の西方の四菩薩、金剛索、十二波羅蜜、義無礙、鬘女、虚空庫等の南方の四菩薩、香女、声女、第四重の南方に位置する神がみは宝生の印をつける。

金剛法等の西方の四菩薩、パーンダラー、金剛鑿、十二自在<sup>290)</sup>、詞無礙、華女、観自在等の西方の四菩薩、燈女、味女、第四重の西方に位置する神がみは阿弥陀の印をつける。

金剛業等の北方の四菩薩、金剛鈴、十二陀羅尼、弁無礙、舞女、無量光等の四菩薩、塗香女、触女、第四重の北方に位置する神がみは不空成就の印をつける。

## 6. マントラの規定

マンジュゴーシャの心種子<sup>291)</sup>は「ムーフ」(mūh)である。「ア、アーハ<sup>292)</sup>、すべての如来の真髓よ、行え、オーン、フーン、フリーヒ、世尊よ、知恵の化身よ、言葉に自在なるものよ、偉大な言葉を語るものよ、すべての存在物をそなえたものよ<sup>293)</sup>、虚空のごとく無垢にして清浄なる法界の智の源よ、アーハ」というのが心マントラ<sup>294)</sup>である。「オーン、アムリタクンダリンよ、ヴィグナールタカよ、フーン」というのがアムリタクンダリン<sup>295)</sup> *Amṛtakunḍalin* のマントラで、すべての行為のためのマントラ<sup>296)</sup>である。

## 訳 註

1) マンダラの観想法では、まずはじめにマンダラの尊格を生み出すための理想的な「場」を設定しなければならない。[立川 1986b: 74-76]によれば、象徴的な文字 (bija: 種子) から、

- 金剛でできた防壁である金剛牆 (vajraprākāra) と金剛籠 (vajrapañjara), そして金剛の大地 (vajrabhūmi) などを生み出す。
- 2) 前章のマンダラとは NPY 第20章の「文殊金剛マンダラ」を指す。ただし、第20章では、金剛籠などの観想法は NPY 第1章「秘密集会文殊金剛マンダラ」を参照するよう指示されている (NG40, 2-3)。第1章には、金剛牆, 金剛籠, そしてヤマーンタカ以下の十忿怒尊の観想法が説かれている (NG1, 20-2, 9)。
- 3) 十忿怒尊はマンダラの四方四維上下を守る十尊のグループで、名称と位置は次のとおりである。ヤマーンタカ Yamāntaka (東), プラジュニャーンタカ Prajñāntaka (南), パドマーンタカ Padmāntaka (西), ヴィグナーンタカ Vighnāntaka (北), アチャラ Acala (北東), タッキラージャ Ṭakkirāja (南東), ニーラダнда Niladaṇḍa (南西), マハーバラ Mahābala (北西), ウシュニーシャチャクラヴァルティン Uṣṇīṣacakravartin (上), スンバラージャ Sumbharāja (下)。以上の十尊は護輪 (rakṣācakra) という名の車輪状の武器に乗ってマンダラを妨害者たちから護衛する。護輪には、各尊が乗る十本の輻があるため十輻輪 (daśāracakra) とも呼ばれる。十忿怒尊に関しては [羽田野 1957: 42-44] [BHATTACHARYYA 1968a: 252-256] [MALLMANN 1964: 111-134] [頼富 1985: 162-164] [立川 1987a: 132] 参照。
- 4) 「3.2 忿怒尊」参照。
- 5) NPY 第20章「文殊金剛マンダラ」では、仏塔 (caitya) が、尊格の住居である楼閣の「容器」として観想される。ただし、実際の図像例には仏塔は表現されない。
- 6) 二重蓮華は文字どおりには「あらゆる方向に花卉を向けた蓮華」であり、実際の図像例では上下二方向に花卉を開いた蓮台として表現される。
- 7) 金剛結跏趺坐は、結跏趺坐 (paryāṅka) の仏教タントリズム流の呼称であり、実際には両者は同じ姿勢である。結跏趺坐については [逸見 1935: 164-166] 参照。
- 8) GGN192, 4, 3: 満月の輝きをそなえた御身; チャンキャ 13, 1, 7: 身色は黄色。
- 9) 金剛杵, 宝, 蓮華, 二重金剛は、順に阿閼, 宝生, 無量光, 不空成就の四仏のシンボルである。このうち、二重金剛は日本では羯磨杵と呼ばれ、金剛杵を十字に交差させた形態を持つが、本来は「あらゆる方向に先端 (鉷) を向けた金剛杵」という意味である。
- 10) [上村 1985: 571] によれば、ラサとは「芸術作品を鑑賞するとき、鑑賞者に生じる美的快感」であり、伝統的には恋情 (śṅgāra), 滑稽 (hāsyā), 慈悲 (karuṇa), 暴虐 (raudra), 勇猛 (vira), 恐怖 (bhayānka), 嫌悪 (bībhatsa), 驚異 (adbhuta) の八種類がある。ただし NPY にはこれ以外のラサも登場する。
- 11) GGN192, 2, 2: 恋情などのラサ。チャンキャはラサへの言及を欠く。
- 12) GGN はこの他にマンジュゴーシャの特徴として「若者の飾りによって飾られ、三十二相八十種好をそなえる」(192, 2, 3) をあげる。パンチェンは「各面は三眼をそなえる」(95, 4) とする。マンジュゴーシャの実際の作例は [CLARK 1965: 115 (4M1)] [LOKESH CHANDRA 1986: 373 (P1. 1002)] 参照。なお、[CLARK 1965] にはこのほかに第二重の女尊の作例も含まれる (詳しくは [田中 1985: 53-56] 参照)。
- 13) プトン 339, 4 と GDK457, 6 は白傘蓋仏頂と光聚仏頂の順序が逆である。[田中 1987: 178] はこれに従う。
- 14) 捨除仏頂のチベット訳には 'od zer rnam par 'phro ba (NT<sub>1-3</sub>, AT<sub>1</sub>, パンチェン 96, 1, チャンキャ 13, 2, 4); rnam par 'gro ba (NT<sub>4</sub>); rnam par 'thor ba (GGN192, 2, 7, プトン 339, 4, GDK458, 1) の三種類がある。

- 15) NT<sub>1-3</sub>, AT<sub>1</sub>: rgyal ba (勝[仏頂]); NT<sub>4</sub>: rgyal ba'i stob (勝力[仏頂])。
- 16) NT<sub>1-3</sub>, AT<sub>1</sub>: gyen du gzung ba (上向きに握る); NT<sub>4</sub>: gyen du srong bar brtson pa (上向きに立てるようにする)。
- 17) NT<sub>1-3</sub>: rang gyi gdan la mnon pa (自分の座をおさえる); NT<sub>4</sub>: rgyab ngos nas rang gi gdan gnän pa ([左手の]甲で自分の座をおさえる); AT<sub>1</sub>: rang gi gdan la brten pa'o (自分の座によりかかる)。
- 18) 面とラサの対応が NT<sub>4</sub> は他のテキストと異なる。NT<sub>4</sub>: khro ba dang bcas pa/ g'yas pa'i zhal dkar po sgeg pa/ nub ser po drang po'i zhal gdangs pa/ g'yon pa dmar po dpa' ba mche bas ma mchu mnan pa//. 他のテキストが中央の面を「忿怒をともなった恋情のラサ」とするのに対し、NT<sub>4</sub> は「忿怒をともなったラサ」とし、恋情のラサを次の右面に対応させる。そのため以下後ろの面が「暴虐のラサ」に、左の面が「勇猛かつ牙をむき下唇を噛む」となる。
- 19) 「タルジャーニー」は人差指を突き立てた手の形で、弾劾、威嚇を示す。同時に竊索を持つことも多い。[BHATTACHARYYA 1968b: 439] [LIEBERT 1976: 295-296] 参照。
- 20) 清水：馬。
- 21) パンチェン 96, 5: 青。
- 22) NT<sub>4</sub>: lcags kyu 'dzin pa'o (鉤を持つ)。
- 23) GGN192, 5, 2: 弓, 竊索。
- 24) NPY にはラサの指定はないが、GGN は「恋情などのラサをそなえる」(192, 5, 4) とする。
- 25) Skt.: vajrabhāṣa (金剛語) に対応する語が、NT<sub>1,3</sub>, AT<sub>1</sub> では rdo rje bsrung ba (金剛護) である。NT<sub>2,4</sub> は Skt. に一致する。チャンキャも「金剛護」(13, 3, 6) とする。
- 26) ガルダ鳥 Garuḍa は半人半鳥の想像上の生き物で、ヴィシュヌの乗り物として知られている。[Dowson 1973: 109-110] 参照。
- 27) GGN は空成就の身色と中央の面の色を黒、右の面を白とする(192, 5, 5-6)。
- 28) AS<sub>2</sub> は「寂静の」から、十二地の第9番不動地の「蓮華の茎を」(NG55, 23) までを欠く(AS<sub>2</sub>141b, 7)。
- 29) GGN192, 5, 7: 鈴, 弓, タルジャーニー。
- 30) NT<sub>1-3</sub>: chibs (御馬); NT<sub>4</sub>: phyibs (意味不明, chibs の誤りか? [Jaschke 1980: 157] chibs の項参照); AT<sub>1</sub>: bzhon pa (乗り物)。
- 31) 清水：開敷蓮月。
- 32) 清水：宝髻冠。
- 33) Skt.: vicitraratnābharaṇāmbarā ratnamukūṭinaḥ のチベット訳はテキストによって解釈が異なる。AT<sub>1-3</sub>: rad na sna tshogs dang gos kyis brgyan pa/ rin po che'i cod pan can no (さまざまな宝石と衣裳で飾られ、宝冠をつける); NT<sub>4</sub>: rin po che sna tshogs kyis brgyan pa/ mdzes pa'i bza' bsnams pa rin po che'i cod pan can no (さまざまな宝石で飾られ美しい衣裳を身につけ宝冠をいただく); AT<sub>1</sub>: rad na sna tshogs dang gos cod pan can no (さまざまな宝石と衣裳, 冠を有する)。なお、カトマンドゥ市内の仏教寺院チュシュヤ・バハール Chuṣya Bahal には、これらの四如来と中尊マンジュゴーシャがほおづえに彫刻されている [VAN Kooij 1977: 51-56]。
- 34) パンチェン 96, 4; 95, 5; 97, 1; 97, 2: 東をはじめとする四方に。
- 35) NT<sub>4</sub>: dal chen mo (大マンダラ)。
- 36) 末尾の補遺参照。

- 37) [清水 1983] には「これに関しては、・・・という説もある」の部分は含まれない。
- 38) NT<sub>4</sub>: re'u mig (小部屋)。
- 39) アバヤーカラグプタは VA の中で、薩埵跏趺坐を「左足の大腿の上に右足を置き、左足を右足の大腿の下に置く」坐法であると説明している (VS<sub>1</sub>31, 5-6)。
- 40) NS<sub>1-2</sub> は tāra を欠く。
- 41) NT<sub>4</sub>: mi skyod pa dang/ rin chen 'byung ldan dang/ snang ba mtha' yas dang/ (阿閼と宝生と阿弥陀と)。
- 42) 清水: 赤白色。GGN193, 3, 3: 白。
- 43) 清水: 金剛と鉤を持ち。GGN193, 3, 3: 金剛の鉤を持ち; パンチェン 97, 5: 鉤を持ち。
- 44) 左足を曲げ右足をその反対方向に伸ばして立つ姿勢である。[逸見 1935: 159] 参照。
- 45) 清水: 金剛と索を持ち。パンチェン 97, 5: 羅索を持ち。
- 46) 展右の左右の足を逆にした姿勢である。
- 47) NT<sub>4</sub>: rdo rje dang lcags sgrog (金剛と鎖)。清水: 金剛と鎖。
- 48) VA によればヴァイシャーカ歩とは「両足を26アングラ (約 50 cm) 外側に向けて開き、両膝を曲げた」姿勢である (VS<sub>1</sub>25, 3-4)。
- 49) 清水: 金剛と鈴。GGN193, 3, 5: 金剛と鈴。
- 50) VA では、マンドラ歩は「ヴァイシャーカ歩の両足の間隔を2ハスタ (約 90 cm) にしハンサ鳥の翼のような形にした」姿勢と規定される (VS<sub>1</sub>25, 4)。
- 51) 清水: 四菩薩
- 52) NT<sub>4</sub> は「一面」に対応する語を欠く。
- 53) チベット訳はテキストによって解釈が異なる。NT<sub>1-3</sub>: dbu skra dmar gser gyen du brdzes pa smra ra dmar ser dang ldan pa (褐色の逆立った髪と褐色の髭を有し); NT<sub>4</sub>: dbu skra dmar po gyen du brdzes shing rmang ra dmar po dang ldan pa (赤い髪は逆立ち、赤い髭を有し)。AT<sub>1</sub> は Skt. に一致する。
- 54) NT: klu chen (大龍)。
- 55) 八匹の龍について NPY 第11章「ヴァジュラフーンカーラマンドラ」は、中尊ヴァジュラフーンカーラ Vajrahūmkāra の装身具として次のように詳細に述べる。  
褐色の髪には青いアナンタ Ananta を巻き付け、赤いタクシャカ Takṣaka は耳飾りにし、蓮の根のように白いマハーパドマ Mahāpadma は瓔珞にし、ダルバ草のような緑色をしたカルコータカ Karkoṭaka は聖紐にし、白いヴァースキ Vāsuki は腰紐にし、黒く美しいパドマ Padma は足輪にし、黄色いジャンカパーラ Śankhapāla は腕釧にし、煙のような雑色のクリカ Kulika は臂釧にして巻き付ける (NG24, 6-9)。
- 56) GGN193, 3, 5, パンチェン 98, 1: 陀羅尼のマンドラ (gzung kyi dkyil 'khor)。
- 57) NT<sub>4</sub>: sa bcu'i dbang phyug rnam (十地の王たち)。
- 58) NT: zhal cig phyag gnyis (一面二臂)。
- 59) 清水: 蓮華。パンチェン 98, 1: 蓮華。
- 60) GGN193, 3, 7: ルビーの色。
- 61) パンチェン 98, 1-2: 般若経の経函。
- 62) GGN193, 3, 8: 水晶の色。
- 63) GGN193, 3, 8-4, 1: 朝焼けの色。
- 64) 清水: 月輪。

- 65) パンチェンは「日輪をのせた」を欠く(98, 2)。
- 66) NT<sub>4</sub>: mar gad lta bu'i mdog ljang khu dmar po can (赤と緑の混じった緑宝色)。
- 67) NT<sub>4</sub> mdun la gnas pa'i lag pa na (前に置いた手に)。清水: さしあげて。
- 68) パンチェン 98, 3: 般若経の経函を持つ。
- 69) AT<sub>1</sub>: sna tshogs chu skye dang sna tshogs rdo rje (二重蓮華と二重金剛杵)。
- 70) AT<sub>1</sub>: nam kha'i mdog can (虚空の色をそなえ)。
- 71) NT<sub>4</sub>: zla ba la gnas pa'i lag pa dang rkyal gyis ma ra ga ta'i rdo rje (月の上にある上を向けた手で五鈷杵を[難勝地の記述の混入か?])。
- 72) 清水: 昼蓮華。
- 73) [清水 1983] は sagarvam の訳語を欠く。
- 74) GGN193, 4, 4: 橙色。
- 75) GGN193, 4, 5: 仏地 (sangz rgyas kyi sa)。
- 76) AS<sub>1</sub> は ahna を欠く。NT<sub>1</sub> も ahna に対応する語を欠く。
- 77) NS<sub>1-2, 4</sub>. AS は amitābha を欠く。Tib. はいずれも amitābha に対応する語を欠く。
- 78) NT<sub>1-3</sub>: bde bar gshegs pa'i sku gzugs (善逝の御像); NT<sub>4</sub>: bde bar gshegs pa'i sku (善逝の御からだ)。
- 79) GGN193, 4, 6, チャンキャ 13, 5, 5: 正等覚を示す仏像をのせた蓮華を持つ; パンチェン 98, 4: 仏像を持つ。
- 80) NT<sub>4</sub>: me'i mtshams nas lho'i phogs su (南東よりはじめて南には)。
- 81) GDK464, 2: 衆生のあらゆる願いを成就させるために如意宝珠を胸に持つ。
- 82) NT<sub>4</sub>: phyag gnyis lhag pas bzhi pa'o (さらに二臂あるため四臂である)。
- 83) AT<sub>1</sub>: nyi ma (太陽)。清水: 財宝。GGN193, 5, 2: さまざまな宝と穀物の穂。
- 84) Tib. はテキストによって解釈が異なる。NT<sub>1-3</sub>: mya ngan med pa'i yal ga dang bcas pa'i me tog gi chun po (無憂樹の枝のついた花房); NT<sub>4</sub>: yal ga dang bcas pa'i me tog gi sngong po (枝のついた花の [以下意味不明]); AT<sub>1</sub>: yal ga dang bcas pa'i mya ngan med pa'i me tog gi chun po (枝のついた無憂樹の花房)。
- 85) Tib.: pad ma dkar po (白蓮)。
- 86) 清水: 黄金色。
- 87) GGN193, 5, 5, プトン 345, 2: 右手では転法輪印を示し、左手には般若経の経函を持つ。GDK は蓮華を持たず、直接、般若経の経函を左手に持つ以外は NPY に一致する (463, 4-5)。
- 88) 「プリヤング (priyangu)」は植物の名称であるが、何を指すかについてはアワ、カラシナなど諸説がある [満久 1977: 151-152]。
- 89) NT<sub>1-3</sub> ral gri dang rdo rje (剣と金剛杵)。
- 90) GGN193, 5, 6: 白い蓮華。
- 91) パンチェン 99, 2: 紺色。
- 92) GGN193, 5, 8, パンチェン 99, 3, チャンキャ 14, 1, 4: さまざまな宝で出来た果実。
- 93) 清水: 業波羅蜜。
- 94) NT<sub>4</sub>: lho nub nas brtsams nas nub du (南西よりはじめて西には)。
- 95) NG, NS: dvādaśavaśitā; AS: daśavaśitā. Tib. も NT は「十二自在」、AS は「十自在」である。
- 96) チャンキャ 14, 2, 3: 赤い睡蓮。

- 97) NT<sub>4</sub>: tshe dbang ba dkar mo (白い命自在)。
- 98) NT<sub>4</sub>: snang ba mtha' yas (無量光)。GGN194, 1, 3-4: 禪定に入った無量寿仏。パンチェンは「ルビーの上に坐し」という規定を欠く(99, 5)。
- 99) NG: raktapañcasūcikavajradharā; NS<sub>2-4</sub>, AS: raktapañcasūkavajradharā; NS<sub>1</sub>: viśvavarṇā vividhavarṇajātilatāhastā [NS<sub>1</sub> は十二自在の第6番生自在の記述の混入か?]
- 100) 清水: 緑色。パンチェン 99, 6: 緑。
- 101) Tib. はテキストによって解釈が異なる。NT<sub>1-3</sub>: me tog 'dza' ti kha dog sna tshogs pa'i yal 'dab (さまざまな色のジャーティ花の枝); NT<sub>4</sub>: kha dog sna tshogs pa'i khri shing (さまざまな色のジャーティ); AT<sub>1</sub>: snam pa sna tshogs pa'i mdog can gyi dza' ti'i khri shing (さまざまな種類の色をそなえたジャーティの木)。パンチェンは単に「ジャーティの枝」とする(99, 6)。なお、ジャーティ(jāti)は、ナツメグとジャスミンのいずれにも用いられる。
- 102) 清水: 空のような暗色。GGN194, 1, 6: 緑。
- 103) 清水: 蓮華の上に月輪を置く。
- 104) 清水: 蓮糸。
- 105) GGN194, 1, 7: プリヤングの花房。
- 106) NG: sitā raktavarṇa を NS<sub>2-3</sub>: sitaraktavarṇā とする。NS<sub>1</sub>: raktavarṇa-; AS<sub>1</sub>: raktā; AS<sub>2</sub>: sitaraktā; NT<sub>1-3</sub>: dkar mo (白); NT<sub>4</sub>: dmar po (赤); AT<sub>1</sub>: dkar mo (白); GGN194, 1, 8: 白みをおびた赤; パンチェン 100, 1: 赤。このように法自在の身色には白, 赤, そして白みをおびた赤の三種類がある。
- 107) NT<sub>4</sub> は bhadra に対応する語を欠く。パンチェンは単に「瓶」とする。
- 108) パンチェンはここまでの十尊について、面数、臂数、右手の持物の規定をここで述べる。(100, 1-2)。GGN は仏菩提女のあとに「これら二尊(如是女, 仏菩提女)の坐法, 頭飾などは自在女たちと同様である」と述べる(194, 2, 2-3)。
- 109) 清水: 如是自在。GGN は「如是女」の語を欠く。
- 110) AS: ratnamañjari (宝の房) と AT: rdo rje rin po che'i snye ma (金剛宝の房) は一致していない。GGN194, 2, 1: 宝で出来た木の枝; パンチェン 100, 1: 金剛宝の房。
- 111) GGN は「ほこらしげに」という規定を欠く。
- 112) 清水: 善意陀羅尼女。
- 113) GGN194, 2, 6: 針と糸。
- 114) GGN194, 2, 7: 木の葉の集まり。
- 115) GGN194, 2, 8: 黄緑。
- 116) パンチェン 100, 5: 宝の瓶をのせた蓮華を手にする。
- 117) NT<sub>4</sub>: spyi blugs la 'phyang ba'i bzlas pa'i phreng ba (水瓶に懸けられた数珠)。
- 118) [清水 1983] は剣に関する記述を欠き, 単に「青蓮」とする。
- 119) 清水: 三鉷金剛の印をつけた瓶。
- 120) NT<sub>1-3</sub>, AT<sub>1</sub>: dpe sgrom (経函); NT<sub>4</sub>: snod (容器)。GGN194, 3, 3: さまざまな色の小箱。
- 121) NT<sub>4</sub> は「縋索」に対応する語を欠く。
- 122) NT<sub>1-3</sub>: pad ma'i ra ga (ルビー)。
- 123) Skt.: ratnapāśa を Tib.: rin po che'i zhags pa に従い「宝の縋索」と解釈する。清水: 宝珠と索; Mallmann: le joyau et la corde。
- 124) GGN194, 3, 6: 赤みをおびた白。



- 125) NT<sub>1-3</sub>, AT<sub>1</sub>: mtha' gnyis su padmas mtshan pa'i lcags sgrog (両端に蓮華のついた鎖): NT<sub>4</sub>: phyag gnyis na padmas mtshan pa'i lcags sgrog (両手に蓮華のついた鎖)。清水: 両手に蓮華の印をつけた鎖を持つ。
- 126) GDK467, 4: 金剛喜女。
- 127) 清水: 黄色。GGN194, 3, 8: 赤みをおびた白。
- 128) NG, NS<sub>1-3</sub>, AS<sub>2</sub>: vādayantī; NS<sub>4</sub>, AS<sub>1</sub>: vādayanti. 清水: 持つ。
- 129) プトン 348, 5, GDK467, 5: 金剛舞女。
- 130) NG: trisūkavajraghaṅṭā を NS<sub>3-4</sub>, AS<sub>2</sub>: trisūkavajravajraghaṅṭā とする。NS<sub>1-2</sub>, AS<sub>1</sub>: trisūkavajraghaṅṭā. NT<sub>1-3</sub>, AT<sub>1</sub>: rdo rje rtse gsum pa dang dril bu (三鈷金剛杵と鈴); NT<sub>4</sub>: rdo rje rtse gsum pa dang rdo rje dril bu (三鈷金剛杵と金剛鈴)。NT<sub>4</sub> は NS<sub>3-4</sub>, AS<sub>2</sub> に一致する。
- 131) GGN194, 4, 2: 手で最勝の遊戯と舞をなさり, それ以外は喜女と同様である; プトン 348, 5: 両手で最高の舞をなさる; GDK467, 6: 最高の舞をなさる。
- 132) NT<sub>4</sub>: rin po che'i rgyan sna tshogs dang/ rin po che'i cod pan sna tshogs dang ldan pa (さまざまな宝石とさまざまな宝冠を有し)。
- 133) Tib. は「あるいは」以下の解釈がテキストによって異なる。NT<sub>1-3</sub>: gzhan de rnam kyang zla ba la gnas pa zhes zer ro (また, これらの者たちも月輪に住しているといわれる); NT<sub>4</sub>: de dag la'ang gzhan dag ni zla ba la gnas pa'o zhes so (これらの者たちについて, 他の者たちは月輪に住しているという); AT<sub>1</sub>: gzhan dag ni de rnam kyang zla ba la gnas pa'o (他の者たちによればこれらの者もまた月輪に住している)。[MALLMANN 1964: 88] は「ただし, 門衛は」以下を「あるものによれば, 門衛たちは日輪にいる。他の者に従えば, 彼らは月に住している」と訳す。[清水 1983] にはこの部分の和訳は含まれない。
- 134) GGN には「2.7 まとめ」に相当する部分はない。プトン, GDK には門衛の位置に関する規定はない。パンチュン 101, 6, チャンキャ 14,4,2 には「門衛は日輪の上に住する」とのみあり, 月輪についての言及はない。
- 135) GDK468, 1: 法マンドラ (chos dkyil)。
- 136) Tib.: dbang ldan nas brtsams nas (北東よりはじめて)。
- 137) GGN194, 4, 5: 法を示すしぐさで。
- 138) NS<sub>1</sub>: vāmena kamaṅḍalu; NS<sub>2</sub>: mena kamaṅḍalu; NT<sub>1-3</sub>, AT<sub>1</sub>: g'yon pas mi 'jigs pas padma (左手は施無畏 [印] で蓮華を); NT<sub>4</sub>: g'yon pas mi 'jigs pa'i phyag rgyas sphi blugs kyi bum pa (左手は施無畏印で水瓶を)。NT<sub>4</sub> の持物の水瓶は NS<sub>1-2</sub> に一致する。
- 139) NT<sub>1-3</sub>: rad na sna tshogs (さまざまな宝); NT<sub>4</sub>: rin po che sna tshogs (さまざまな宝); AT<sub>1</sub>: rin po che thams cad (あらゆる宝)。
- 140) 清水: 与えつつ。
- 141) NT<sub>4</sub>: yid sbyin gyi nor bu [yid bzhin gyi nor bu の誤り?]. GGN194, 4, 7: 如意宝幢; パンチュン 102, 2, チャンキャ 14, 1, 5: 宝。
- 142) NT<sub>1-3</sub>, AT<sub>1</sub>: bum pa bzang bo la 'phyang ba'i dpag bsam gyi shing (吉祥の瓶に懸けられた如意樹); NT<sub>4</sub>: bum pa bzang bo 'phyang ba'i dpag bsam gyi shing (吉祥の瓶を懸けた如意樹)。GGN194, 4, 8: 吉祥の瓶に懸けられた如意樹; パンチュン 102, 3: 吉祥の瓶から下がった如意樹。
- 143) GGN349, 3: 宝を与えるようにする。

- 144) 清水：大海慧菩薩。
- 145) NS<sub>1</sub> と AS は vajra を欠く。NT は NG に， AT は AS にそれぞれ一致する。GGN194, 5, 1: 左手には剣を持つ。
- 146) NS<sub>1</sub> と AS は dala を欠く。NT<sub>1-3</sub> は NG に一致する。NT<sub>4</sub> は NS<sub>1</sub> と同じく dala に対応する語を欠く。AT<sub>1</sub> は AS に一致する。
- 147) GGN194, 5, 2-3: 身色は白，無量光の化仏をつける。
- 148) NT: chu skyes dkar po(白蓮)。パンチュン 102, 4, チャンキャ 14, 4, 8: 赤蓮華。
- 149) NT<sub>4</sub>: zla bas mtshan pa'i padma (月を印とする蓮華)。
- 150) NT<sub>4</sub>: padma nyi mas mtshan pa (太陽を印とする蓮華)。
- 151) GGN194, 5, 5: 二重金剛杵。
- 152) NG, NS<sub>1-2</sub>: cchoṭīkām を NS<sub>3-4</sub>, AS: cchoṭīkām dadat とする。ただし，NT は dadat に対応する語を欠く。
- 153) GGN194, 5, 7: さんぜんと輝く五鉷金剛杵。
- 154) NT<sub>4</sub>: pad ma (蓮華)。
- 155) GDK470, 1-2: 観音を除き，宝冠をいただく。観音は無量光の化仏を額に付けている。訳註147) 参照。
- 156) NT<sub>1-3</sub>: rin po che sna tshogs dang gos sna tshogs kyiis brgyan pa (さまざまな宝石とさまざまな衣裳で飾られる)。
- 157) GGN は四維，四方の順である。
- 158) NS<sub>1</sub> は ṣaṅmukhaḥ ṣaḍcaranaḥ を欠く。AT<sub>1</sub> は「六足」に対応する語を欠く。
- 159) GGN195, 3, 5-6: 弓，鈴。
- 160) 面の色は中央の面が青，以下，右回りに青，白，黄，赤，緑で，これらの上に青い第六面がのる。足の姿勢は一對で展右，一對で展左，もう一對で金剛結跏趺坐をする (NG 51-52)。
- 161) NT<sub>4</sub>: lho phyos kyi sgor (南門には)。
- 162) 清水：嫉妬ラサ。
- 163) NT<sub>4</sub> は Skt.: mahā に対応する語を欠く。清水：忿怒ラサ。
- 164) 面の色については，GGN および，いずれの注釈書も身色と同じであるとのみ説き，各面が異なる説はあげられていない。これは他の忿怒尊においても同様である。
- 165) GGN195, 4, 3: 鉤を持ってタルジャーニーを示す。
- 166) AT<sub>1</sub> は Skt.: hṛdyankuṣaṃ vajra- に対応する語を欠く。
- 167) NT<sub>4</sub> には身色に関する記述がない。
- 168) GGN195, 4, 3: 左手は第一臂でタルジャーニーを示し，残りの手で絹索と弓を持つ。
- 169) GGN はこのあとに「恋情などのラサをそなえる」と述べる (195, 4, 5)。
- 170) 「金剛縛」とは両手を固く組む手つきである。
- 171) NT<sub>1-3</sub>: rdo rje dril bu (金剛鈴); NT<sub>4</sub>: rdo rje dang/ dril bu (金剛杵と鈴); AT<sub>1</sub>: dril bu (鈴)。GGN195, 4, 5: 鈴; GDK471, 5: 金剛と鈴。
- 172) 四維の四尊の尊容は GGN と NPY の間でかなりの異同が見られる。このうち，GGN のトライローキヤヴィジャヤ，ヴァジュラジュヴァーラーナラールカ，パラマーシュヴァの記述は，順に『成就法の花環』*Sādhanaṃālā* [BHATTACHARYYA 1968b] Nos. 262, 263, 261 とよく一致する。なお，トライローキヤヴィジャヤの作例として [HUNTINGTON 1984: Pl. 110] が GGN のものによく一致する。

- 173) NT<sub>4</sub>: sngon po zhal bzhi ba (身色は青, 四面である)。
- 174) [清水 1983] は面色の規定に触れていない。
- 175) ヴェジュラフーンカーラ印は降三世印とも呼ばれる。VA は、降三世印を「金剛杵と金剛鈴をもつ両方の金剛の拳の甲を合わせて、両方の小指をからめ、両方の人差指を伸ばす」(VA<sub>1</sub> 34, 2-3) と規定する。[GETTY 1962: 20] と [GORDON 1978: 23] の解説と図像例では小指をからめていない。清水: 金剛剣字印。
- 176) 清水: 戟。
- 177) GGN195, 1, 3-4: 左手には弓, 綱索, 金剛杵を持つ。
- 178) 清水: 頭。
- 179) AT<sub>1</sub> は Skt.: kṛṣṇa に対応する語を欠く。これは NG と一致する。
- 180) GGN195, 1, 6: 慈悲など。
- 181) GGN195, 1, 7-8: さまざまな旗。
- 182) カトヴァーンガは先端に頭蓋骨などを連ねた棒である。[GORDON 1978: 17] [MALLMANN 1975: Pl. II-8] 参照。
- 183) GGN195, 2, 1: 展左。
- 184) ヴェジュラジュヴァーラーナラルカの尊容について, GGN はこのほかに八龍の装身具をあげる (195, 1, 8-2, 1)。
- 185) NT<sub>4</sub> は面色の青への言及を欠く。
- 186) NT<sub>1-3</sub>: rab tu dga' ba'i bzhad pa (歓喜の笑い); NT<sub>4</sub>: rab tu dga' bar byed pas myos pa (歓喜させることによって酔いしれ); AT<sub>1</sub>: rab tu dga' bas bzhad pa (歓喜による笑い)。清水: 酩酊。
- 187) GGN195, 2, 2: 先端の輝く金剛杵。
- 188) カパーラは人間の頭蓋骨で作った容器である。[GORDON 1957: 15] [MALLMANN 1975: Pl. II-10] 参照。
- 189) NT<sub>1-3</sub>: rlung gis gos (風による衣 [gis は gi の誤りか?]); NT<sub>2-4</sub>: rlung gi gos (風の衣); AT<sub>1</sub>: rlung ras (風布)。
- 190) GGN はヘルカヴァジュラの持物を以下のように規定する。右の第一臂は先端の輝く五鈷杵, 左の第一臂は旗と鈴を付けたカトヴァーンガ, 左右の第二臂でマハーバイラヴァの生皮を外衣のように持つ。左右の第三臂で矢と弓, 右の第四臂で血の溢れるカパーラ, 左の第四臂で肉に満ちたカパーラをそれぞれ持つ (195, 2, 3-5)。
- 191) NG, NS<sub>3</sub>: śyāmaḥ catur- を NS<sub>4</sub>, AS: śyāmaḥ śyāmacatur- とする。NS<sub>1-2</sub> は śyāmacatur- である。Tib. は NT<sub>1-3</sub> が NS<sub>1-2</sub> に, NT<sub>4</sub> が NS<sub>4</sub>, AS に, AT<sub>1</sub> が NG, NS<sub>3</sub> にそれぞれ一致する。
- 192) GGN195, 2, 7: 三眼をそなえる。
- 193) NT<sub>4</sub>: sna tshogs rdo rje ba dan dang bcas (二重金剛杵と旗をともない); AT<sub>1</sub> は sna tshogs rdo rje ba dan dang ldan pas (二重金剛杵, 旗をともなって)。
- 194) 右の第一, 第二臂に関して GGN は「(第一臂で) 三本の旗のように二重金剛杵を威嚇の手つきで持ち……(第二臂で) 三本の旗のように直立の手つきをする」(195, 2, 8-3, 1) とする。
- 195) AT<sub>1</sub>: gsum pas ral gri/ bzhi bas mda' (第三臂には剣を, 第四臂には矢を持つ)。清水: 剣, 弓を。
- 196) NT<sub>4</sub>: padma (蓮華)。GGN195, 2, 8: カトヴァーンガと二重蓮華。

- 197) GGN195, 3, 2: 展左の四足を有する。
- 198) GGN195, 3, 2: インドラとインドラーニー。プトンと GDK は NPY に一致する。
- 199) GGN195, 3, 3: シャクラ; パンチェン 105, 1: インドラーニー。
- 200) GGN195, 3, 3: ヴィシュヌ。
- 201) パラマーシュヴァに踏みつけられるこれらの神がみはヒンドゥー教の神である。インドラーニー, シュリー, ラティ, プリーティは, 順にインドラ, マドゥカラ, ジャヤカラ, ヴァサントの妻である。
- 202) GGN は上下の忿怒尊を含まない。
- 203) パンチェン 105, 2: 青。
- 204) NG, NS<sub>1</sub>: -anvitacaturvaktraḥ を NS<sub>2-4</sub>: -anvitakṛṣṇacaturvaktraḥ とする。AS は -anvitah kṛṣṇacaturvaktraḥ である。NT<sub>1-3</sub> は NS<sub>2-4</sub> に, NT<sub>4</sub> は NG, NS<sub>1</sub> に, AT<sub>1</sub> は AS にそれぞれ一致する。
- 205) NS<sub>1</sub> は āliḍha で写本の第62葉の表が終わり, スンバに関する記述もここで終わっている。NG で Bhttacharyya が用いた写本 B は, NS<sub>1</sub> との共通点が数多く認められるが, この箇所は葉の途中にもかかわらず NS<sub>1</sub> と同じくスンバの記述は āliḍha で終わっている。これは写本 B が NS<sub>1</sub> 以降に成立し, その系統に属するためであると考えられる。
- 206) NS<sub>4</sub>, AS: raktavartulatrinetrāḥ (赤く丸い三眼)。
- 207) 清水: 虎の皮の上衣をまとい。
- 208) 清水: 八竜を飾っている。
- 209) NG: -maṇḍalasya を NS, AS: -maṇḍalasyaiva とする。Tib. は AT<sub>1</sub> にのみ, eva に対応する語である nyid が認められる。
- 210) GGN は華女以下の四尊は四維に, 金剛色女以下の四尊は四方の門に住するとする (195, 5, 1-3)。
- 211) パンチェン 105, 6: 青。
- 212) Tib. より「香の容器」と解釈する。Skt.: kaccchū は意味が明らかではない。清水: 香炉。
- 213) 清水: 宝灯竿。GGN194, 1, 8: 灯明の柄。
- 214) 清水: 香具。
- 215) GGN195, 5, 1: 右手に鏡を持つ。
- 216) GGN195, 5, 2: 金剛のヴィーナーを手にする。
- 217) GGN195, 5, 2: 金剛香女 (rdo rje dri)。
- 218) パンチェン 106, 1, チャンキャ 15, 4, 7: 味覚の器 (ro'i snod)。
- 219) GGN195, 5, 3: 金剛味女 (rdo rje ro ma)。
- 220) パンチェン 106, 1: 緑。
- 221) GGN195, 5, 3: 味覚の器。
- 222) NS<sub>1-2</sub> は ratna (宝) のかわりに rakta (赤い) とある。
- 223) [清水 1983] は座を「月輪の中で」とする。
- 224) 護方尊 (dikpāla) は世界を守ると考えられたヒンドゥー教の神がみで, 護世神 (lokapāla) とも呼ばれる。[BANERJEA 1974: 519-529] 参照。なお, NPY は護方神を四方, 四維の順に説くが, GGN は北東のイーシャーナから順に右回りに説く。
- 225) 神がみがアスラ (asura) とともに乳海を攪拌したときに現れたとされる象で, インドラの

- 乗り物として知られる。[Dowson 1973: 9] 参照。
- 226) GGN195, 4, 6: 金剛杵を手にする (左手に関する規定はない)。
- 227) パンチェン 106, 3: 青。
- 228) NT<sub>4</sub>: phyag gnyis na dun dkar po 'dzin pa/ sbrul gyi zhags pa'o (二臂にほら貝を持つ。蛇の索を [持つ])。GGN196, 1, 1: 蛇の索を持つ; プトン 355, 3: ほら貝と蛇の索を持つ; GDK475, 6: 右手にほら貝, 左手に蛇の索を持つ。
- 229) NT<sub>4</sub>: lcags kyu dang shag ti dang dbyug to 'dzin pa'o (鉤と短槍と棍棒を持つ)。
- 230) GGN195, 5, 4: 三鈷のカトヴァーンガ。プトン, GDK は NPY と同じである。
- 231) NT<sub>4</sub> は kapāli に対応する語を欠く。
- 232) GGN は「頭蓋骨と半月……首が青い」の部分で欠く。プトン 354, 6: 二臂で合掌し, 頭上に置く。
- 233) NT<sub>1-3</sub>: blugs gzar dang spyi blugs (杓と水瓶); NT<sub>4</sub>: glugs bzar gyi spyi blugs (杓の水瓶); AT<sub>1</sub> blugs gar spyi blugs (杓, 水瓶)。GGN195, 5, 7: 右の二臂に杓と杖を, 左の二臂に数珠を水瓶を持つ。
- 234) NT<sub>4</sub> ral gri gdengs pa dang ri dags gsod pa'i phyag rgya 'dzin pa'o (剣を振り上げ, 動物を殺す手つきをする)。
- 235) NS<sub>1</sub> は mṛge vāyuh を次行の (i)śapraṇāmāñjalayah の代わりに置く。
- 236) GGN195, 5, 7: 旗を持つ。
- 237) NG: nilotpaladharah は NS<sub>1</sub> 以外の Skt., Tib. いずれのテキストにも含まれない。NS<sub>1</sub> は直前の vāyu の記述がこの部分に混入しており, NG もヴァーユの身色と持物の規定 (nilo vātapuṭadharah) との混同と考えられる。NG の脚注17, および訳註205) 参照。
- 238) NT<sub>1-3</sub>: zhal bzhi ni ser po'o (四面は黄色である); NT<sub>4</sub>: zhal bzhi yang ser po'o (四面も黄色である)。
- 239) NT<sub>4</sub>: ..... 'dzin pas thal mo sbyar ba (……を持ち合掌する)。GGN196, 1, 1: 蓮華と数珠を持つ。
- 240) GGN は前半の二臂で「合掌する」と述べる。
- 241) NT<sub>4</sub>: dung dang 'khor lo 'dzin pas spyi bor thal mo sbyar ba (ほら貝と円盤を持ち, 頭上で合掌する)。NS<sub>2</sub> は śankha のかわりに khadga (剣) とする。
- 242) NT<sub>4</sub> は kṛtāñjalir に対応する語句を欠く。
- 243) GGN196, 1, 6: 弓と棍棒を持つ。
- 244) GGN196, 1, 7: 三叉戟とカパーラを持ち, 頭上で合掌する。明妃たちの集まりによって囲まれる。
- 245) GGN196, 1, 8: 少年のような表情。
- 246) NT<sub>1-3</sub>, AT<sub>1</sub> には「六面」の後に phyag drug pa (六臂) の語句がある。
- 247) パンチェン 107, 4: 頭上で合掌する。
- 248) GDK476, 5: カールティケーヤをのぞき, シャクラ (インドラ) 以下の十一尊は左側に各自の明妃をとめない, 頭上で合掌し, 世尊 (マンジュゴーシャ) に礼拝する姿勢をとる。
- 249) GGN はブラフマーニーからガナパティまでを二十八宿のあとに説く (196, 4, 5 ff.). 母神については [立川 1984, 1986a, 1986c] 参照。
- 250) パンチェン 107, 4-5 とチャンキャ 16, 1, 4 はルドラーニーとヴァイシュナヴィーの記述の

順が逆である。

- 251) AT<sub>1</sub> は *indrāṇi indravat* に対応する語句を欠く。
- 252) GGN196, 4, 6: 死体。
- 253) GGN は持物をローヒタ魚とカパーラとするのみで、臂数と合掌については言及しない (196, 4, 6)。ローヒタ魚 (*rohita*) は魚の一種とされるが、詳細は不明。
- 254) AT<sub>1</sub> はチャームダナーの記述の前に *byi ba la tshogs bdag* (鼠の上にガナパティ) とガナパティに関する記述が混入している。
- 255) NG, NS<sub>1-3</sub>: *savyetarā*; NS<sub>4</sub>: *savyetarā 'parābhyām*; AS: *savyetarakarā 'parābhyām*. Tib. は NT<sub>1-3</sub> が NS<sub>4</sub> に, NT<sub>1</sub> が NG, NS<sub>1-3</sub> に, AT<sub>1</sub> が AS にそれぞれ一致する。
- 256) GGN は「残りの手で合掌する」を欠く。
- 257) GGN はプリンギーの尊名のみをあげ、尊容については言及しない (169, 4, 7)。
- 258) プリンギーの臂数は Skt. からは二臂であるのか、四臂であるのか明らかではない。二臂の場合、左右の手で数珠とカマンダルを持ちながら合掌し、四臂の場合は和訳のようになる。NT<sub>1-3</sub> は明確に四臂であると述べる。NT<sub>4</sub> は Skt. 同様、臂数が明らかではない。なお、AS は *kṛtāñjliḥ* の前に *dvābhyām* (二臂で) とあり、四臂であることがわかる。AT<sub>1</sub> は AS に一致する。GDK480, 5: 頭上で合掌する。
- 259) 聖紐 (*yajñopavīta*) はウパナヤナ (*upanayana*; 入門式) を終えた再生族が身につける紐である。
- 260) GDK はガナパティの後に、両手に宝の壺をもつ地神 *Pr̥thivīdevī* を加える (480, 6-481, 1)。したがって、GDK の場合、全体の尊格数は219尊になる。
- 261) 九星の研究には [MITRA 1965] [PAL and BHATTACHARYYA 1969] [清水 1984] がある。
- 262) GGN196, 2, 3: 象の上に。
- 263) GGN196, 2, 4: 蓮華の上に。
- 264) GGN196, 2, 4: 壺の上に。
- 265) GGN196, 2, 5: 黒。
- 266) NG, NS: *omit śyāmaś*; AS: *śyāmaś*; NT<sub>1-3</sub>: *ljang gu bya ko ki la'i shing rta la zhon pa ljang gu* (緑色, コーキラ鳥の車に乗り, 緑色); NT<sub>4</sub>: *ljang khu* (緑色)。いずれの注釈書も身色は緑と規定する。
- 267) GGN196, 2, 6: 弓と杯を持つ。
- 268) GGN196, 2, 6-7: 弓と杯を持つ。
- 269) NT<sub>1-3</sub>: *btung ba'i snod dang gzhu* (杯と弓)。GGN196, 2, 7: 手に矢, 弓, 杯, 剣を持つ。
- 270) NT<sub>1-3</sub>: *yab kyi g'yas pa'i phyag mtshan gyi gtso bo* (父の右手の第一の持物); NT<sub>4</sub>: *rigs bdag gi phyag mtshan gyi gtso bo* (部族主の第一の持物)。
- 271) GGN およびいずれの注釈書にも「あるいは各自...合掌する」の部分の欠く。ただし、GGN は次のように述べる。「このうちアナンタとクリカはバラモン姓で、身色は赤、アグニの子である。ヴァースキとジャンカパーラはクシャトリヤ姓で身色は黄、ジャクラの子である。タクシャカとマハーパドマはヴァイシャ姓で身色は黒、ヴァーユの子である。カルコータカ、パドマはシュードラ姓で身色は白、ヴァルナの子である」(196, 2, 8-3, 2)。またプトンと GDK は身色のみをあげるが、それらは GGN のものと一致する。
- 272) GGN196, 3, 2: プラナンダ (*rab dga'*)。

- 273) AT<sub>1</sub> は *vairocana* に対応する語を欠く。
- 274) NT<sub>1-3</sub>: *go cha sna tshogs* (さまざまな甲冑)。
- 275) GGN 196, 3, 3: 広げた羽はさまざまな色。
- 276) GGN は「ヴィーナをひく」に対応する語を欠く。
- 277) GGN 196, 3, 6-7: 金色。
- 278) NT<sub>1-3</sub>: *bi tsi kuṅḍha li*; NT<sub>4</sub>: *pi tsi kuṅ dha li* (ヴィチクンダリン)。GGN 196, 3, 8; パンチェン 109, 5, チャンキャ 16, 3, 8: ヴィチクンダリン。
- 279) Skt.: *jadī* は意味不明。Tib. は NT: *zam gyi chang bu*; AT<sub>1</sub>: *chang bu*。ここでは [Das 1986: 408] の *chang bu* の項の説明に従う。
- 280) 二十八宿の身色は注釈書によって相違が多くみられるが、逐一指摘しない。
- 281) NT<sub>4</sub> は婁宿 (*aśvin*) の訳語として、一般に第三宿昴宿 (*kṛttikā*) の訳語である *smin drug* をあてる。そのため、NT<sub>1-3</sub>、AT<sub>1</sub> と NT<sub>4</sub> のあいだでは二十八宿の訳語の対応がふたつずつずれることになる。
- 282) NT<sub>1-3</sub>: *sto g'yogs g'yo ba dang bcas pa* (なびく上衣をまとい); NT<sub>4</sub>: *sto g'yogs dang smad g'yogs g'yo dang bcas* (なびく上衣と下衣をまとい); AT<sub>1</sub>: *g'yo ba dang bcas pa'i sto g'yogs yong su 'dzin pa* (なびく上衣をしっかり持つ)。
- 283) NT<sub>1-3</sub>, AT<sub>1</sub>: *rdo rje lcags skyu ma* (金剛鉤女)。
- 284) NT<sub>4</sub>: *nang gi sgo* (内の門)。
- 285) 「1.5 四摂菩薩」参照。なお、プトン 359, 4 と GDK 481, 4-6 は門衛として、ヤマータカ *Yamāntaka*、アパラージタ *Aparājita*、ハヤグリーバ *Hayagrīva*、ヴァジュラバイラヴァ *Vajrabhairava* の四尊を四摂のさらに外に置く。
- 286) NT<sub>4</sub>: *bcom ldan 'das rnam par snang mdzad chen po'i bdag nyid ni 'jam pa'i dbyangs te* (偉大な世尊ヴァイローチャナの本質はマンジュゴーシャであり)。
- 287) 大円鏡智が阿閼に、平等性智が宝生に、妙観察智が阿弥陀に、成所作智が不空成就にそれぞれ対応する。
- 288) NT<sub>1-3</sub>: *rdo rje gzugs ma* (金剛色女); NT<sub>4</sub>: *gzugs rdo rje ma* (色金剛女); AT<sub>1</sub>: *gzugs ma* (色女)。
- 289) AS は *pūrva* を欠く。ただし、AT<sub>1</sub> は *shar* (東) を含む。
- 290) NG: *dvādaśa vaśitādayo* を AS: *dvādaśāyurvaśitādayo* とする。Tib. は NT が AS に一致し、AT は *tshe dang dbang ma bcu gnyis* (十二の命と自在) とある。
- 291) 心種子とは、それぞれの尊格を象徴する単音節のマントラである。[BHATTACHARYYA 1968a: 433] 参照。
- 292) この箇所は NS<sub>1</sub>: *a āḥ*; NS<sub>2-3</sub>: *aṃ āḥ*; AS: *a ā*; NT<sub>1-3</sub>: *a ā*; NT<sub>4</sub>: *a aḥ*; AT<sub>1</sub>: *om a āḥ* と多岐にわたる。
- 293) NG: *sarvadharmagagana-* を *sarvadharmā gagana-* と二句に分ける。
- 294) 心マントラは、各尊格固有のマントラである。
- 295) 日本では軍荼梨明王の名で知られる忿怒尊である。[頼富 1985: 102-104] 参照。
- 296) すべての行為に関するマントラとは、さまざまな仏教の実践において各行為が支障なく成就するように唱えられるマントラである。

## サンスクリット・テキスト

① 以下にあげたのは『完成せるヨーガの環』第21章「法界語自在マンダラ」のサンスクリット・テキストである。使用したテキストとその略号については和訳の冒頭にあげた略号と凡例を参照。

② サンスクリット写本にはつづり字の誤り（r と l, b と v の交替等）や母音の長短の混乱がしばしばみられるが、煩雑を避けるため校註には NG を採用しない場合に限り異同を註記するにとどめた。

### 0

dharmadhātuvāgīśvaramaṇḍale 'nantaramaṇḍala<sup>1)</sup> iva vajrapañjarādi-  
bhāvanāvyavasthā/yamāntakādayaḥ krodhāḥ param atra vakṣyamānarūpās  
caityam iha nāsti/

### 1

1. kūṭāgārasya nābhau viśvābjakarnikāsthitasimhopari viśvāmbhojacandre  
mañjuḥṣo vajraparyaṅki bālārkamaṇḍalaprabhaḥ suvarṇavarṇa<sup>2)</sup> indranilā-  
grasaccīro<sup>3)</sup> vajraratnapadmaviśvavajramālāmukuṭopari pañcabuddharatn-  
akirīṭi vicitraratnābharaṇāmbaraḥ śrṅgārarasarāśiḥ pītanilaraktasitamūlasavya-  
paścimavāmamukho 'ṣṭabhujō dvābhyāṃ dharmacakramudrāṃ<sup>4)</sup> savyaiḥ  
krpāṇabānavajrāṇi vāmaiḥ prajñāpāramitāpustakacāpavajraghaṇṭā bibhrāṇaḥ/  
2. aṣṭadalasthasimhopari padmendumaṇḍaleṣu<sup>5)</sup> prāgādikṣu mahōṣṇiṣasitāta-  
patratejorāśivijayoṣṇiṣāḥ/

iśānādividikṣu vikiraṇa udgato mahodgato jayaś ca<sup>6)</sup>/  
ete aṣṭoṣṇiṣā<sup>7)</sup> vajraparyaṅkiṇo ratnamukuṭāḥ<sup>8)</sup> pītavarṇā dvibhujā dakṣiṇa-  
pāṇinā cakrotkarṣaṇaparā<sup>9)</sup> vāmakarenāvaṣṭavya svāsanāḥ<sup>10)</sup>/

3. ataḥ pūrvakoṣṭhasya madhye gajarāje 'kṣobhyo nilāś caturvaktro mūlāsyaṃ  
nilaṃ sakrodhaśrṅgāraṃ savyaṃ śubhraṃ vyāttaṃ<sup>11)</sup> raudraṃ paścimaṃ<sup>12)</sup>  
pītaṃ vīraṃ vāmaṃ raktaṃ daṃṣṭrākarālam aṣṭabhujō dakṣiṇaiḥ khadgavajra-  
bāṇāṅkuśabhṛd vāmais tarjanīghaṇṭācāpapāśadharāḥ<sup>13)</sup> vajrasattvavajrarājava-  
jrarāgavajrasādhubhiḥ parivrtaḥ/

dakṣiṇakoṣṭhasya madhye 'svarāje ratnasambhavaḥ pītaḥ pītakṣṇasuklara-  
ktacaturmukho 'ṣṭabhujāḥ savyair vajrakhadgabāṇāṅkuśān vāmais cintāmaṇi-  
dhvaṃ vajraghaṇṭāṃ pāśaṃ cāpaṃ ca dadhānaḥ vajraratnavajrasūryavajra-  
ketuvajrahāsyaiḥ parivrtaḥ/

paścimakoṣṭhasya madhye mayūre 'mitābho rakto<sup>14)</sup> raktakṣṇasuklapīta-



caturvaktro<sup>15)</sup> 'ṣṭabhujāḥ savyair vajrabāṇakhaḍgāṅkuśān vāmaiḥ padmacāpa-  
pāśaghaṇṭā<sup>16)</sup> bibhrāṇaḥ vajradharmavajratīkṣṇavajrahetuvajrabhāṣaiḥ<sup>17)</sup>,<sup>18)</sup>  
parivrṭtaḥ/

uttarakoṣṭhasya madhye garuḍe 'moghasiddhiḥ śyāmaḥ caturmukhaḥ  
mūlaṃ śyāmaṃ daṃṣṭrākarālaṃ dakṣiṇaṃ pītaṃ śāntaṃ paścimaṃ raktaṃ  
saśṛṅgāraṃ vāmaṃ sitaṃ śāntaṃ aṣṭabhujō dakṣiṇaiḥ khaḍgavajrabāṇāṅkuśa-  
bhṛd vāmais tarjanīghaṇṭīcāpapāśadharāḥ vajrakarmavajrarakṣavajrayakṣava-  
jrasandhibhiḥ parivrṭtaḥ/

akṣobhyādayas tathāgatāḥ svavāhanopari viśvapadmasūryeṣu vajraparya-  
ṅkaṇiṣaṇṇā vicitraratnābharaṇāmbārā ratnamukuṭiṇaḥ/ vajrasattvādayas tu  
ṣoḍaśeśānādikoṇasthaviśvapadmacandreṣu vajradhātumaṇḍaloktasvarūpāḥ/  
atrāpi dikṣu sthitā ity api pakṣo 'sti/

4. aiśānādikoṇasthaviśvābjenduṣu sattvaparyāṅkiṇyo locanāmāmakipāṇḍa-  
rātārā yathākramaṃ mañjughoṣākṣobhyāmitābhāmoghasiddhisannibhāḥ<sup>19)</sup>/

5. pūrvadvāre vajrāṅkuśo raktagauro vajrāṅkuśapāśabhṛd<sup>20)</sup> āliḍhasthaḥ/  
dakṣiṇe vajrapāśaḥ pīto vajrapāśabhṛt pratyāliḍhasthaḥ/  
paścime vajrasphoṭo raktaḥ vajraśṛṅkhalābhṛd<sup>21)</sup> bhujadvayo vaiśākhapada-  
sthaḥ/

uttaradvāre vajrāveśaḥ śvāmo vajrabandhena karadvayagrhitavajraghaṇṭo  
maṇḍalapadasthaḥ/

ete catvāro viśvābjasūryeṣu sthitā dvibhujās<sup>22)</sup> trinetraikavadanāḥ piṅgordhva-  
keśāśmaśravo 'ṣṭanāgābharaṇāḥ/

## 2

1. ato garbhamaṇḍalāt dvitīyamaṇḍale pūrvasyāṃ diśy aiśānyāḥ<sup>23)</sup> prabhṛti  
pradakṣiṇaṃ yathākramaṃ dvādaśabhūmayo dvibhujā dakṣiṇe vajradhāriṇyo  
vāmena svasvacihnadharāḥ/

tatrādhimukticyābhūmiḥ padmaraktā raktapadmadharā/

pramuditā raktā cintāmaṇibhṛt/

vimalā śuklā śuklajalajadharā<sup>24)</sup>/

prabhākari raktā viśvapadmasthasūryamaṇḍaladharā/

arciṣmati marakatavarṇā nilotpaladharā/

sudurjayā pītotsaṅgasthottānapāṇinā<sup>25)</sup> marakatamaṇidharā/

abhimukhī hemavarṇā padmopari prajñāpāramitāpustakadharā/

dūraṅgamā gaganāśyāmā viśvapadmopari viśvavajradharā/

acalā śaraccandrābhā candrastharaktapañcaśūka vajrāṅkitapaṅkajasya<sup>26)</sup>

nālaṃ sagarvaṃ bibhrati/

sādhumatī sitā khaḍgāṅkitotpaladharā/

dharmameghā pītā<sup>27)</sup> dharmameghaparikalitaprajñāpāramitāpustakadharā/  
samantaprabhā madhyāhñādityavarṇā padmopari samyaksambodhisūcakāmi-  
tābhabuddhabimbadharā/

2. dakṣiṇasyāṃ dvādaśapāramitā dvibhujāḥ savyena cintāmaṇibhṛto<sup>28)</sup>  
vāmena svasvacihnadharāḥ/ prajñāpāramitā tv adhikakaradvayā/  
tatra ratnapadmapāramitā<sup>29)</sup> raktā padmasthacandramaṇḍaladharā/  
dānapāramitā sitaraktavarṇā nānādhānyamañjarīhastā/  
śīlapāramitā śvetā sapallavāśokakusumastavakakarā<sup>30)</sup>/  
kṣāntipāramitā pītā sitābjadharā/  
vīryapāramitā marakatavarṇā nilotpaladharā/  
dhyānapāramitā gaganaśyāmā sitābjahastā/  
prajñāpāramitā kamanīyakanakakāntiḥ padmasthaprajñāpāramitāpustaka-  
dharā karadvayena dhṛtadharmacakramudrā/  
upāyapāramitā priyaṅguśyāmā pītapadmasthavajrabhṛt/  
praṇidhānapāramitā nilotpalavarṇā nilotpalasthakhadgadharā/  
balapāramitā raktā prajñāpāramitāpustakadharā/  
jñānapāramitā śubhrā nānāratnaphalālaṅkṛtabodhivṛkṣalatādharā<sup>31)</sup>/  
vajrakarmapāramitā viśvavarṇā nilotpalasthaviśvavajradharā/

3. paścimāyāṃ dvādaśavaśītā dvibhujā dakṣiṇenāmbhojabhṛto vāmena  
sagarvaṃ svasvacihnadharāḥ/  
tatrāyurvaśītā sitaraktavarṇā padmarāgamaṇisthasamādhimudrāmitāyurbu-  
ddhabinbadharā/  
cittavaśītā sitā raktapañcaśūkavajradharā<sup>32)</sup>/  
pariṣkāravaśītā pītā cintāmaṇidhvajadharā/  
karmavaśītā haritā viśvavajradharā/  
upapattivaśītā viśvavarṇā vividhavarṇājātilatāhastā/  
ṛddhivaśītā nabhaśyāmā padmasthasūryacandramaṇḍaladharā/  
adhimuktivaśītā mṛṇālagaurā priyaṅgukusumamañjarīdharā/  
praṇidhānavāśītā pītā nilotpalahastā/  
jñānavāśītā nilā<sup>33)</sup> nilotpalasthakhadgadharā/  
dharmavaśītā sitaraktavarṇā<sup>34)</sup> padmasthabhadraghaṭahastā/  
tathatā śvetā śubhrāmbhojabhṛd<sup>35)</sup> dakṣiṇapāñir vāmena vajjaratnamañjarī-  
dharā<sup>36)</sup>/

buddhabodhiprabhā kanakābhā savyena pītapadmasthapañcasūcikavajradharā  
vāmena cintāmaṇidhvajopari cakradharā/

4. uttarasyāṃ dvādaśadhāriṇyo dvibhujāḥ savyena viśvavajraṃ bibhrāṇā  
vāmena sagarvaṃ svasvacihnabhṛtaḥ/  
tatra vasumatī<sup>37)</sup> pītā dhānyamañjarīdharā/

ratnokā raktā cintāmaṇidhvajadharā/  
 usṇiṣavijayā sitā candrakāntamaṇikalaśahastā/  
 māricī<sup>38)</sup> raktagauravarṇā sasūtrasūcidharā/  
 parṇaśabarī śyāmā mayūrapicchadharā/  
 jāṅgulī suklā viṣapuşpamañjaridharā/  
 anantamukhā<sup>39)</sup> priyaṅguśyāmā raktābjasthākṣayamahānidhikalaśahastā/  
 cundā śuklā akṣasūtrāvalambitakamaṇḍaludharā/  
 prajñāvardhanī sitā nilotpalaśthakhaḍgadharā<sup>40)</sup>/  
 sarvakarmāvaraṇavisodhanī haritā triśūkavajrāṅkasitaraktakamaladharā<sup>41),42)</sup>/  
 akṣayajñānakaraṇḍā raktā ratnakaraṇḍadharā/  
 sarvabuddhadharmakoṣavaṭī pītā padmasthanānāratnapetaḥkadharā/  
 5. pūrvadvāre dharmapratiṣaṃvit sitaraktā vajrāṅkuśapāśabhṛd bhujadvayā/  
 dakṣiṇe 'rthapratiṣaṃvit marakatavarṇā savyetarabhujābhyaṃ ratnapāśabhṛt/  
 paścime niruktiḥpratiṣaṃvit raktā antadvaye padmāṅkaśṛṅghalābhṛd<sup>43)</sup> bhujad-  
 dvayā/  
 uttare pratibhānapratiṣaṃvit marakataśyāmā triśūkavajrāṅkitaghaṇṭāvyagra-  
 karadvayā<sup>44)</sup>/  
 6. āgneyakoṇe lāsyā pītā sagarvaṃ karābhyaṃ vajradvayaṃ bibhratī/  
 nairṛtye mālā raktagauravarṇā ratnamālābhṛd bhujadvayā/  
 vāyavye gītā raktā hastabhyaṃ viṇāṃ vādayanti/  
 aiśānyāṃ nṛtyā śyāmā dhṛtatriśūkavajraghaṇṭā<sup>45)</sup> nṛtyad bhujayugmā/  
 7. eta adhimukticyābhūmiprabhṛtayo devyaḥ sarvā vicitraratnābharaṇa-  
 ambarā ratnamukuṭinyāḥ smerāsyāḥ<sup>46)</sup> śṛṅgāriṇyo viśvapadmendumaṇḍale  
 sattvaparyāṅkanisaṇṇāḥ/  
 dvārapālāḥ paraṃ sūryeṣu<sup>47)</sup>/ tā api candrasthā ity anye/

3

1. tṛṭiyamaṇḍale aiśānyāḥ prabhṛti<sup>48)</sup> bodhisattvāḥ/  
 tatra pūrvasyāṃ paṭṭikāyāṃ samantabhadraḥ pītaḥ savyena varado vāmena  
 utpalasthakhaḍgadharāḥ/  
 akṣayamatīḥ pītaḥ savyena khaḍgaṃ vāmenābhayena kamalaṃ<sup>49)</sup> bibharti/  
 kṣitigarbhaḥ pīto dakṣiṇena kṛtabhūsparśo vāmābjasthakalpdrumadharāḥ<sup>50)</sup>/  
 ākāśagarbhaḥ śyāmaḥ savyena sarvaratnavarṣi vāmena cintāmaṇibhṛt/  
 dakṣiṇasyāṃ gaganagañjaḥ pītaḥ savyena cintāmaṇibhṛd vāmena bhadrā-  
 ghaṭāvalambitakalpavṛkṣam dadhānaḥ/  
 ratnapāṇiḥ śyāmo dakṣiṇapāṇinī ratnaṃ vāmenābjasthacandramaṇḍalaṃ  
 bibhrānaḥ/  
 sāgaramatīḥ sitaḥ savyena śāṅkhaṃ vāmena vajrakhaḍgaṃ dadhānaḥ/

vajragarbho nilotpaladalavarṇo dakṣiṇena vajraṃ vāmena daśabhūmaka-<sup>51)</sup>  
pustakadharaḥ/

paścimāyām avalokiteśvaraḥ śubhraḥ savyena varado vāmena saroja-  
dharah/

mahāsthāmaprāptaḥ pītaḥ savyena khaḍgam vāmena padmaṃ dadhānaḥ/  
candraprabhaḥ śubhraḥ savyena vajracakraṃ vāmena padmasthacandrama-  
ṇḍalam dhatte/

jālinīprabhaḥ sitaraktaḥ savyenāsiṃ vāmenābjasthasūryam/

uttarasyām amitaprabhaḥ sitaḥ savyena viśvapadmaṃ vāmenābjastha-  
kalaśam bibhrānaḥ/

pratibhānakūṭaḥ pīto dakṣiṇena cchoṭikāṃ dadat<sup>52)</sup> vāmena padmasthakrṇpā-  
ṇaṃ dhatte/

sarvaśokatamonirghātamatīḥ kuṅkumavarṇaḥ savyena pañcaśūkakuliśam<sup>53)</sup>  
vāmena śaktiṃ dadhānaḥ/

sarvanivaraṇaviṣkambhī nilaḥ krṇpānabhrt savyapāṇiḥ vāmena viśvavajrāṅka-  
patākādharaḥ/

ṣoḍaśāpy ete viśvāmbhojacandreṣu sattvaparyāṅkiṇo ratnamukuṭiṇo  
nānāratnavastramaṇḍitā dvibhujaiakamukhāḥ/

2. pūrvadvāre mahiṣe yamāntakaḥ kṛṣṇas tundi<sup>54)</sup> ṣaṇmukhaḥ ṣaṇbhujah<sup>55)</sup>  
ṣaḍcaraṇah<sup>56)</sup> savyair<sup>57)</sup> aṅkuśakrṇpānabāṇān vāmais tarjanipāśam ghaṇṭām  
cāpaṃ ca dadhānaḥ/ mukhacaraṇānām viśeṣaḥ pūrvavat/

dakṣiṇe prajñāntakaḥ pītaḥ pītacaturmukho<sup>58)</sup> mūlamukhaṃ saśṛṅgāram  
savyaṃ vyātam<sup>59)</sup> paścimaṃ mahāraudraṃ vāmaṃ śāntam/ atha vaitāni<sup>60)</sup>  
yathākramaṃ pītanīlāraktaharītāni/ aṣṭabhujō 'yaṃ savyaiḥ pāśavajrakhadga-  
bāṇān vāmaiḥ hr̥dyāṅkuśam vajraghaṇṭām śaktiṃ cāpaṃ ca dadhānaḥ/

paścime padmāntako rakto raktacaturvaktraḥ<sup>61)</sup> śṛṅgāraudrahāśya-  
śāntarasānvitāni mūlasavyapr̥ṣṭhavāmamukhāni/ atha vaitāni<sup>62)</sup> raktakṛṣṇa-  
pītasitāni/ aṣṭabhujō 'sau dvābhyām vajrasphoṭam<sup>63)</sup> savyair vajrakhadgabāṇān  
vāmair ghaṇṭātarjanipāśacāpānvitah/

ete trayo lalitākṣepeṇa sthitāḥ/

uttare vighnāntako nīlo nilacaturmukhaḥ<sup>64)</sup> atha vaitāni<sup>65)</sup> nilapītara-  
ktaharītāni/ aṣṭabhujō 'sau dvābhyām vajrabandhena ghaṇṭām<sup>66)</sup> dakṣiṇaiḥ  
krṇpānabāṇāṅkuśān vāmais tarjanipāśam cāpaṃ ghaṇṭām ca dadhāno vināya-  
kaṃ pratyālidhenākramya sthitah/

iśānakoṇe trailokyavijayo nīlo nilacaturmukhaḥ<sup>67)</sup> mūlam sakrodha-  
śṛṅgāram savyam raudraṃ pr̥ṣṭham vīraraśam vāmaṃ bibhatsam/ atha vaitā-  
ni<sup>68)</sup> nilapītaraktasitāni aṣṭabhujō dvābhyām vajraghaṇṭānvitābhyām hr̥di va-  
jrahūṃkāramudrām savyaiḥ khaḍgāṅkuśabāṇān vāmaiḥ kulīśapāśacāpān

grhñānaḥ<sup>69)</sup> pratyāliḍhena vāmapādākrāntamaheśvaramastako dakṣiṇacaranenāvāṣṭabdomāstanaḥ/

agnau vajrajvālānalārkaḥ kṛṣṇaḥ śṛṅgāravirabībhatsakarunarāsānvitakṛṣṇacaturmukhaḥ<sup>70)</sup>/ atha vaitāni<sup>71)</sup> nīlasitapītaraktāni<sup>72)</sup>/ aṣṭabhujō 'sau savyair vajrāsīsaracakraḥ vāmair ghaṇṭām pāśam cāpaṃ khaṭvāṅgāsaktapatākāṃ ca bibhartti<sup>73)</sup> sapatnikam viṣṇum āliḍhenākramya sthitaḥ/

nairṛtye herukavajro nīlo nilacaturvadano<sup>74)</sup> mūlam raudram savyam pramohamohitam<sup>75)</sup> pṛṣṭham bhakṣaṇodyatam vāmam saśṛṅgāram/ atha vaitāni<sup>76)</sup> nīlaraktaharitaśuklāni/ aṣṭabhujō 'yam dakṣiṇaiḥ pañcaśūkhavajram<sup>77)</sup> bānam raktapūrṇakapālam vāmair ḥṛdi kamalalalikāṃ dhanuḥ saghaṇṭāpatākakhaṭvāṅgam dvābhyām mahābhairavacarma vātapaṭam<sup>78)</sup> iva dadhānaḥ sapatnikam brahmāṇam pratyāliḍhenākramya sthitaḥ/

vāyavye paramāśvaḥ śyāmaḥ śyāmacaturvaktraḥ<sup>79)</sup> mūlam sakrodhaśṛṅgāram savyam raudram vāmam brahmamukham/ atha vaitāni<sup>80)</sup> haritanīlaśuklāni mūrdhnyasvāmukham haritam/ aṣṭabhujō 'sau saviśvavajratripatākānvitasavyenottiṣṭhābhīnayaṃ<sup>81)</sup> dvitīyena tripatākābhīnayaṃ dvābhyām khaḍgabāṇau/ vāmena keṭakahastena<sup>82)</sup> viśvābjam tribhīḥ śaktidaṇḍacāpān bibhrānaḥ/ āliḍhapratyāliḍhābhyām catuścāraṇaḥ/ dakṣiṇenaikenendrāṇim śriyam ca dvitīyena ratim pṛitim ca vāmenaikenendramadhukaram<sup>83)</sup> ca dvitīyena jayakaram vasantam cāvāṣṭabhya<sup>84)</sup> sthitaḥ/

cakreśasyordhvakoṇe uṣṇīśacakraḥ pītaḥ caturmukhaḥ pītanīlaraktasitacaturmukho<sup>85)</sup> vāṣṭabhujāḥ savyaiś cakrāṅkuśakṛpāṇabāṇān vāmair ghaṇṭāpāśakṣamālādhanūṃṣi dadhāno lalitākṣepeṇa sthitaḥ/

adhastāt sumbharājāḥ kṛṣṇo raudraśāntahāsyāśṛṅgārarasānvitakṛṣṇacaturvaktraḥ<sup>86)</sup> kṛṣṇasitaraktapītacaturmukho vāṣṭabhujāḥ<sup>87)</sup> savyair vajrāṅkuśāsīsarān vāmair ghaṇṭāpāśaśūlakārmukāni bibhrānaḥ pratyāliḍhena sthitaḥ/

ete daśakrodhāḥ viśvāmbhojasūryasthāḥ pratimukham ratkatrinetrāḥ kṛtabhrūbhaṅgā vyāghracarmāambarottariyāḥ kapālamālāmukuṭā dīptabaddhordhvapiṅgalakeśāḥ piṅgaśmaśravo 'ṣṭabhiḥ phaṇīśair bhīṣaṇāḥ/

3. tṛtīyamaṅḍalasyaiva<sup>88)</sup> koṇābhīyantare trailokyavijayādīkrodhebhyaś caturbhyo bāhyarekhāyā āgneyādicatuḥkoṇasūtrāṇāṃ<sup>89)</sup> savyapārśveṣu puṣpādyāḥ vāmapārśveṣu bāhyasthāne<sup>90)</sup> vajrarūpādyāḥ/

tatra puṣpā pītā puṣpapuṭahastā/

dhūpā kṛṣṇā dhūpakāṭacchūhastā/

dīpā raktā ratnapradīpayaṣṭihastā/

gandhā śyāmā gandhaśāṅkhahastā/

vajrarūpā pītā darpaṇapāṇiḥ/

vajrasabdā śyāmā viṇāhastā/

vajrarasā<sup>91)</sup> raktā gandhabhājanabhujā/

vajrasparsā viśvavarṇā viśvavastrahastā<sup>92)</sup>/  
aṣṭāv ete dvibhujā ratnamukuṭīnyo vicitravastraratnamaṇḍitāḥ padmenduṣu  
sattvaparyañkiṇyaḥ/

4

1. caturthavajrakulamaṇḍale<sup>93)</sup> aindryām diśi śubhraitāvātārūḍha<sup>94)</sup> indraḥ  
pīto vajraṃ stanam ca dadhānaḥ/  
yāmyām mahiṣe yamaḥ kṛṣṇo daṇḍasūlabhṛt<sup>95)</sup>/  
vāruṇyām<sup>96)</sup> makare varuṇaḥ śvetaḥ saptaphaṇo nāgapāśaśaṅkhabhṛt/  
kauveryyām nare kuberaḥ pīto<sup>97)</sup> 'nkuśagadādharah/  
aiśānyām vṛṣabhārūḍha iśānaḥ sitaḥ trisūlakapālapāṇiḥ kapālijaṭārdhacandra-  
dharah<sup>98)</sup> sarpayañjōpavitī nilakaṇṭhaḥ/  
āgneyyam chāge 'gniḥ raktaḥ sruvakamaṇḍaludharah/  
nairṛtyām rākṣasādhipo nairṛtiḥ nilaḥ śavārūḍhaḥ<sup>99)</sup> khaḍgaketakabhṛta-  
karaḥ<sup>100)</sup>/

vāyavyām mrge vāyur nilo vātapuṭadharah/  
ete 'ṣṭau caturbhujāḥ savyena prathamam cihnam vāmena kroḍitasvābha-  
patnikena<sup>101)</sup> dvitīyam bibhrāṇā dvābhyām śirasi kṛtacakreśapraṇāmāñjala-  
yaḥ<sup>102)</sup>/

2. iśānasya samīpe bahir aiśānyādiśaḥ<sup>103)</sup> prabhṛti krameṇa brahmādayaḥ/  
tatra haṃse brahmā pītaś caturmukhaś caturbhujō 'kṣasūtrābjabhṛt savyetarā-  
bhyām kṛtāñjalir daṇḍakamaṇḍaludharah/  
garuḍe viṣṇuḥ kṛṣṇaś<sup>104)</sup> caturbhujāś cakraśaṅkhabhṛt savyavāmābhyām  
mūrdhni kṛtāñjalir gadāśārṅgadhanurdharah<sup>105)</sup>/  
vṛṣabhe maheśvaraḥ sitaḥ śaśikanakāṅkitajaṭājūṭaś<sup>106)</sup> caturbhujāḥ śirasi  
kṛtāñjalis trisūlakapālabhṛt/

mayūre kārttikeyo raktaḥ ṣaṇmukhaḥ savyābhyām śaktim vajraṃ ca vāmāb-  
hyām kukkuṭaḡhaṇṭam<sup>107)</sup> ca dadhāno dvābhyām kṛtāñjaliḥ/  
ete 'pi pūrvavad āliṅgitasvābhapatnikāḥ/

3. brahmāṇī tu brahmavat/  
rudrāṇī rudravat/  
vaiṣṇavī viṣṇuvat/  
kaumārī kārttikeyavat/  
indrāṇī indravat/

vārāḥi kṛṣṇā pecakārūḍhā caturbhujā savyavāmābhyām rohitamatsyakapāla-  
dharā dvābhyām kṛtāñjaliḥ/  
pretopari cāmuṇḍā raktā caturbhujā kartrikapālabhṛt savyetarā kṛtāñjaliḥ<sup>108)</sup>/  
bhṛṅgi kṛṣṇaḥ kṛśo<sup>109)</sup> 'kṣasūtrakamaṇḍaludharah kṛtāñjaliḥ/

4. mūṣake gaṇapatih sitaḥ karivakraḥ sarpayañjōpavitī caturbhujāḥ savyā-

- bhyāṃ triśūlaladḍukau vāmābhyāṃ parsumūlake<sup>110)</sup> dadhānaḥ/  
mahākālah kṛṣṇas triśūlakapālabhṛt/  
nandikeśvaraḥ kṛṣṇo murajārūdhō murajavādanaparaḥ/  
5. saptaturagarathe ādityo ratko dakṣiṇahastena vāmena ca padmasthasūrya-  
maṇḍaladharah/  
hamse candrah śubhrah savyahastena vāmena ca kumudasthachandramaṇḍala-  
bhṛt/  
chāgale maṅgalo raktaḥ savyena kaṭṭāraṃ vāmena mānuṣamuṇḍaṃ bhakṣa-  
ṇābhīnayaena dadhānaḥ/  
padme budhaḥ pītaḥ śaradhanurdharaḥ/  
bheke kapāle vā bṛhaspatir gauro 'kṣasūtrakamaṇḍaludharaḥ/  
śukrah śuklah kamalastho 'kṣasūtrakamaṇḍalubhṛt/  
kacchape śanaīścaraḥ kṛṣṇo daṇḍadharah/  
rāhū raktakṛṣṇaḥ sūryacandrabhṛtsavyetarakaraḥ/  
ketuḥ kṛṣṇaḥ khaḍganāgapāśadharah/  
6. kuñjare balabhadraḥ sitaḥ khaḍgalāṅgaladharah/  
kokilarathe jayakaraś caturbhujah savyābhyāṃ puṣpamālāṃ bāṇaṃ ca  
vāmābhyāṃ caṣakadhanuṣī dadhānaḥ/  
śukasyandane madhukaro gauraś caturbhujah savyābhyāṃ makaradhvaśaśa-  
rau<sup>111)</sup> vāmābhyāṃ caṣakacāpau bibharti/  
plavaṅge vasantaḥ sitaś caturbhujah savyābhyāṃ bāṅakṛpāṇabhṛd vāmābhyāṃ  
dhanuścaṣakadharah/  
7. anantavāsukitakṣakarkkoṭakapadmamahāpadmaśaṅkhapālakulikāḥ sa-  
ptaphaṇāḥ<sup>112)</sup> kṛtāñjalayaḥ svasvapituḥ pradhānaciḥnayuktāñjalayo vā/  
8. vemacitribaliprahādavairocanādayo mahāsurendrāḥ kṛṣṇāḥ<sup>113)</sup> sanna-  
ddhabaddhakavacāḥ khaḍgakheṭakādīnānāpraharaṇavyagrakarāḥ<sup>114)</sup>/  
9. garuḍendraḥ kṛtāñjalih prasāritapakṣo vā yāvaj jānu śubhras tadūrdhvaṃ  
nābhiṃ yāvat pītas tadūrdhvaṃ kaṇṭhaṃ yāvad raktas tadūrdhvaṃ mastakaṃ  
yāvat kṛṣṇaḥ/  
drumakinnararājendro<sup>115)</sup> raktagauro viṇāvādanaparaḥ/  
pañcaśikho gandharvarājendraḥ pīto viṇāṃ vādayati/  
sarvārthasiddho vidyādhararājendro gauraḥ kusumamālāhastah/  
10. pūrṇabhadro nilaḥ/ māñibhadraḥ pītaḥ/ dhanado raktaḥ/ vaiśravaṇaḥ  
pītaḥ/ civikuṇḍali raktaḥ/ kelimāli śyāmaḥ/ sukhendraḥ pītaḥ/ calendrah pītaḥ/  
pūrṇabhadrādayo yakśādhipā bijapūraphalanakulabhṛt savyetarakarāḥ/  
11. hārītī pītā jaḍīdvayadhāriṇī saputrā/  
12. aśvinī sitā/ bharaṇī haritā/ kṛttikā śyāmā/ rohiṇī raktagaurā/ mṛgaśirā  
kṛṣṇā/ ārdrā pītā/ punarvasuḥ pītā/ puṣyā śyāmā/ āśleśā śuklā/ maghā pītā/

pūrvaphālgunī priyaṅguśyāmā/ uttaraphālguni haritā/ hastā sitā/ citrā haritā/  
svātī pītā/ viśākhā kṛṣṇā/ anurādhā śyāmā/ jyeṣṭhā pītā/ mūlā pītā/ pūrvāśādhā  
kṛṣṇā/ uttarāśādhā pāṇḍuvarṇā<sup>116)</sup>/ śravaṇā sitagaurā/ dhaniṣṭhā kṛṣṇā/ śata-  
bhiṣā pītā/ pūrvabhādrapadā haritā/ uttarabhādrapadā pītā/ revatī śuklagaurā/  
abhijih<sup>117)</sup> śyāmā/

aśvinyādayo devyaś calanakañcukīparidhānāḥ<sup>118),119)</sup> kṛtāñjalayaḥ/  
anye 'pi devā vimānasthā vijñeyāḥ/

13. etāḥ śakrādyā devatāḥ padmasthāḥ pratyekam aparimitaparivārās ca  
yathāyogaṃ vicitravastraratnādyalañkṛtā bhagavantam maṇḍaleśam nama-  
syanto jojotkaramukharitadinmukhāḥ/

14. pūrvādidvāreṣu vajrāñkuśādayo dvārapālā yathā garbhamaṇḍale/

5

iha bhagavān mahāvairocanātmā mañjughoṣaḥ suviśuddhadharmadhātu-  
jñānasvabhāvaḥ svābhavajrasattvena mudritāḥ/

ādarśādījñānasvabhāvākṣobhyāditathāgatās catvāra uṣṇīṣā locanā ca  
mañjughoṣeṇa/

vajrasattvādayaś catvāro māmakivajrāñkuśadvādaśabhūmayo<sup>120)</sup> dharmā-  
pratiśamvit lāsyā samantabhadrādayaś catvāro daśakrodhaḥ puṣparūpāpūrva-  
diksthitadevatās<sup>121)</sup> cākṣobhyeṇa/

vajraratnādayaś catvāro vajrapāśo dvādaśapāramitārthapraśamvit mālā  
gaganagañjādayaś catvāro dhūpā śabdā dakṣiṇadiggatadevatās ca ratnasam-  
bhavena/

vajradharmādayaś catvāraḥ pāṇḍarā vajrasphoṭā dvādaśāyurvaśītāda-  
yo<sup>122)</sup> niruktipraśamvitgītā 'valokitādayaś catvāro dipā rasā paścimadiga-  
vasthitadevatās cāmītābhena/

vajrakarmādayaś catvāro vajrāveśo dvādaśadhāriṇyaḥ pratibhānaśamvit  
nṛtyā 'mitaprabhādayaś catvāro gandhā sparśottaradiggatās ca amoghaśiddhinā  
mudritāḥ/

6

mañjughoṣasya hṛdbījaṃ mūḥ/ a āḥ<sup>123)</sup> sarvatathāgatahṛdaya hara hara  
oṃ hūṃ hrīḥ bhagavan jñānamūrtti vāgīśvara mahāvāca sarvadharmā gaganā-  
amala supariśuddhadharmadhātuñānagharbha āḥ iti hṛdayamantraḥ/ oṃ  
amṛtakunḍali vighnāntaka hūṃ iti amṛtakunḍalimantraḥ sārvaśarmikaḥ/  
iti dharmadhātuvāgīśvaramaṇḍalam//



テキスト校註

- 1) NG -maṇḍala; NS<sub>1</sub> -maṇḍale; NS<sub>2</sub> -maṇḍale anantramaṇḍala; NS<sub>3-4</sub> -maṇḍale 'rananta-mala; AS<sub>1</sub> -maṇḍale 'nantaramaṇḍala.
- 2) NG suvarṇavarṇaḥ; NS<sub>1</sub> śuvarṇa; NS<sub>2</sub> suvarṇasuvārṇa.
- 3) NG nilābha-.
- 4) NG -mudraḥ; NS<sub>1</sub> -mudrāḥ.
- 5) NG padmacandra-; NS<sub>3</sub> padme candra-
- 6) NG vikīraṇodgatamahodgatojaś ca; NS<sub>1</sub> vikīraṇa udgato mahogato jayayaḥ; NS<sub>3</sub> vikīraṇa mahodgato udgatojaś ca.
- 7) NG -uṣṇīśāḥ; NS<sub>1</sub> -uṣṇīṣo; AS<sub>2</sub> -uṣṇīṣa.
- 8) NG -mukūṭyaḥ; NS<sub>1-2</sub> -mukūṭo; NS<sub>3-4</sub> -mukūṭiḥ.
- 9) NG cakrākaraṣaṇa-; NS<sub>1</sub> cakokaṣaṇa-.
- 10) NG avaṣṭabdhāsanāḥ; NS<sub>1</sub> avaṣṭabhyāṃ sanā; NS<sub>2</sub> avaṣṭarvva svāsanā; NS<sub>4</sub> avaṣṭabhya ssvasvāsanā; AS<sub>1</sub> avaṣṭac ca svāsanāḥ; AS<sub>2</sub> avaṣṭac ca ddhasvāsanāḥ (?).
- 11) NG, NS<sub>1-2</sub> vyāvṛttam.
- 12) NG paścime.
- 13) NG, NS<sub>1-2</sub> -pāśacāpa-.
- 14) NG, NS<sub>1,3</sub> omit rakto.
- 15) NG -vastro.
- 16) NG -ghaṇṭāḥ; AS<sub>1</sub> ghaṇṭa.
- 17) NG vajredharma-.
- 18) NG -tīkṣṇahetu-
- 19) NG omits -ābha-.
- 20) NG omits -pāśa-.
- 21) NG -śṛṅkhala-.
- 22) NG -bhujāḥ; NS<sub>3</sub> -bhujā.
- 23) NG, AS<sub>1</sub> diśi aiśānyāḥ; NS<sub>1</sub> diśaiśānyāḥ; NS<sub>2</sub> diśy aiśānāḥ; NS<sub>3</sub> diśi aiśyamā; NS<sub>4</sub> diśy aiśānyāṃ.
- 24) NG śuklakamala-; NS<sub>1</sub> jalaja-; NS<sub>3</sub> śuklajala-; NS<sub>4</sub> śubja-; AS<sub>1</sub> śvetābja-.
- 25) NG, NS<sub>1</sub> pītā utsaṅga-.
- 26) NG -pañcasūcika-; NS<sub>4</sub> -raktapañcaka-.
- 27) NG omits pītā.
- 28) NG, NS<sub>1</sub> cintāmaṇidhvajaṃ; NS<sub>4</sub> omits cintāmaṇi.
- 29) NG ratnapāramitā.
- 30) NG sapallavagaurakusumacakraḥ; NS<sub>1</sub> parravaḥ/ śakakuṅjamatavakarā.
- 31) NG, NS<sub>1</sub> omit -latā-.
- 32) NG, NS<sub>1</sub> -sūcika-; NS<sub>2</sub> -sūka-.
- 33) NG, NS<sub>3</sub> sitanilā; NS<sub>1</sub> omits nilā.
- 34) NG sitā raktavarṇa-; NS<sub>1</sub> raktavarṇa-; AS<sub>1</sub> raktā; AS<sub>2</sub> sitaraktā.
- 35) NG, NS<sub>1</sub> śvetaśubhra-.
- 36) NG, AS<sub>1-2</sub> omit vajra.
- 37) NG sumatī; NS<sub>1</sub> vasumati.
- 38) NG mārī; NS<sub>1</sub> marati; NS<sub>2</sub> marici; AS<sub>2</sub> mārīci.
- 39) NG, NS<sub>3-4</sub> -mukhī.
- 40) NG, NS<sub>1</sub> omit -stha-.
- 41) NG -sūcika-.
- 42) NG, NS<sub>1</sub> omit rakta.
- 43) NG baddhapadmānta-; NS<sub>1</sub> antadvaya padmāka-; NS<sub>4</sub> duṣṭadvaye padmāṅka-; AS<sub>1</sub>

- anantadvaye padmānki-; AS<sub>2</sub> antadvayena padmānka-.
- 44) NG -sūcika-.
- 45) NG -trisūcikavajraghaṅṭā; NS<sub>1</sub> trisūcavajraghaṅṭabhya; NS<sub>2</sub> -trisūcavajraghaṅṭā.
- 46) NG apsarāsyāḥ; NS<sub>1</sub> omits smerāsyāḥ; NS<sub>3</sub> śmarasyāḥ; NS<sub>4</sub> sperāsyāḥ; AS<sub>1</sub> ime lāsyāḥ; AS<sub>2</sub> smelāsyāḥ.
- 47) NG dvālapālyo 'parasūryeṣu; NS<sub>1</sub> parasūryeṣu; NS<sub>2</sub> dvārapāre 'parasūryeṣu.
- 48) NG aiśānyādiprabhṛti; NS<sub>1</sub> aiśānyā prabhṛti; NS<sub>4</sub> aiśānya prabhṛti.
- 49) NG abhayakamalaṃ NS<sub>1-2</sub> kamaṅḍalu; AS<sub>1-2</sub> abhayena padmaṃ.
- 50) NG vāmena; NS<sub>1</sub> vāme; NS<sub>2</sub> mena.
- 51) NG -bhūmika-; NS<sub>1</sub> -bhū-; NS<sub>2</sub> -bhūrkaṃ.
- 52) NG, NS<sub>1-2</sub> omit dadat.
- 53) NG -sūcika-.
- 54) NG tundilaḥ; NS<sub>1</sub> omits tundī; NS<sub>2</sub> tudī.
- 55) NG omits śaṅbhujāḥ.
- 56) NS<sub>1</sub> omits śaḍcaranaḥ.
- 57) NG savyena.
- 58) NG, NS<sub>1-2</sub>, AS<sub>1-2</sub> omit pīta-.
- 59) NG savyaṃ serśaṃ; NS<sub>1-2</sub> savyāntaṃ;
- 60) NG, NS<sub>1-2</sub> ca.
- 61) NG, NS<sub>1-2</sub> omit rakta-.
- 62) NG, NS<sub>1-2</sub> ca.
- 63) NG omits dvābhyāṃ vajrasphoṭaṃ; NS<sub>1</sub> dvābhyāṃ vajrasphoṭa; NS<sub>2</sub> dvābhyāṃ vajrasphoṭaṃ; AS<sub>1-2</sub> dvābhyāṃ vajrasphoṭaḥ.
- 64) NG omits nīla-; NG<sub>1-2</sub> omit nīlo.
- 65) NG, NS<sub>1-2</sub> ca.
- 66) NG vajraghaṅṭe.
- 67) NG omits nīla-; NG<sub>1-2</sub> omit nīlo.
- 68) NG, NS<sub>1-2</sub> ca.
- 69) NG gr̥hṇan.
- 70) NG omits kṛṣṇa-.
- 71) NG, NS<sub>1-2</sub> ca.
- 72) NG, NS<sub>1-2</sub> -pītasita-.
- 73) NG bibharti; NS<sub>1-2</sub> bibhatti.
- 74) NG omits nīla-; NG<sub>1-2</sub> omit nīlo.
- 75) NG, NS<sub>3-4</sub> pramohitaṃ.
- 76) NG, NS<sub>1-2</sub> ca.
- 77) NG sūcika.
- 78) NG, NS<sub>1</sub> omit vāta; AS<sub>1</sub> vāṭapaṭam.
- 79) NG, NS<sub>3</sub> omit śyāma-; NS<sub>1-2</sub> omit śyāmaḥ.
- 80) NG, NS<sub>1-2</sub> ca.
- 81) NG omits saviśvavajratripatākānvita-; NS<sub>1</sub> saviśvavajratripatākāvita.
- 82) NG, NS<sub>3-4</sub> khaḍga-; NS<sub>1</sub> kaṭa-; NS<sub>2</sub> kata-.
- 83) NG indraṃ madhu-.
- 84) NG padā 'vaṣṭabhya.
- 85) NG pītanīlaktasitacaturmukhāś; NS<sub>1</sub> caturmukham pītanīlaktasito; NS<sub>3-4</sub> pītaḥ caturmukhaḥ pītanīlaktasitacaturmukho vā.
- 86) NG, NS<sub>1</sub> omit kṛṣṇa-.
- 87) NG, NS<sub>1</sub> mukhāś cāṣṭa-; NS<sub>2</sub> mukho cāṣṭa-; AS<sub>1-2</sub> mukho vā/ aṣṭa-.
- 88) NG omits eva.
- 89) NG, NS<sub>1-2</sub> -catuṣkoṇa-

- 90) NG, NS<sub>1</sub> *omit* bāhyasthāne; NS<sub>2</sub> bāhyasthāme.  
 91) NG vajrerṣyā.  
 92) NG, NS<sub>1</sub> vísvavajra-.  
 93) NG caturthe vajrakūlamaṇḍale; NS<sub>1</sub> caturthe vajrakūlamaṇḍale.  
 94) NG aindrādidiḥsu airāvātārūḍha; NS<sub>1-2</sub> aindrādiśi bhrairavatārūḍha; NS<sub>3-4</sub> aindryādiśi śubhbrairāvātārūḍha; AS<sub>2</sub> aiśānyāṃ diśi śubhbrairāvātārūḍha.  
 95) NG yamadaṇḍa-.  
 96) NG, NS<sub>1</sub> vāruṇe; NS<sub>2</sub> vāyusyā.  
 97) NG supīto; NS<sub>1</sub> syapīto.  
 98) NG *omits* kapālī-.  
 99) NG śave; AS<sub>1-2</sub> śavāsanah.  
 100) NG -khetakabhṛt; NS<sub>1</sub> -karaḥ; NS<sub>2</sub> khetakabhṛtkarāḥ.  
 101) NG ākroḍita-; NS<sub>2</sub> sukroḍita-; AS<sub>1</sub> kroḍi-.  
 102) NG -añjalayaḥ nilotpaladharāḥ; NS<sub>1</sub> -añjalayaḥ nilotpaladha.  
 103) NG -ādidiśah; NS<sub>1-2</sub> -ādīśam.  
 104) NG *omits* kṛṣṇāś; NS<sub>1</sub> kṛṣṇa.  
 105) NG *omits* -dhanur-.  
 106) NG -jaṭāmukutaś.  
 107) NG kukkuṭam; NS<sub>1</sub> ghaṇṭāms; AS<sub>1-2</sub> kukkutaṃ khaṇṭām.  
 108) NG -añjali.  
 109) NG kṛṣṇa-; NS<sub>2</sub> kṛṣṇo-.  
 110) NG paraśu-.  
 111) NG -śare; NS<sub>1-2</sub> -śaro.  
 112) NG, NS<sub>4</sub> -phaṇa-; NS<sub>3</sub> *omits* -phaṇāḥ-.  
 113) NG *omits* kṛṣṇāḥ.  
 114) NG -khetakādīnā praharaṇa-.  
 115) NG kṛṣṇarūpaḥ; NS<sub>2</sub>, AS<sub>2</sub> kṛṣṇah drumā-; NS<sub>3</sub> kṛṣṇah rūpaḥ; NS<sub>4</sub> kṛṣṇah drumah;  
 AS<sub>1</sub> kṛṣṇah/ drumah.  
 116) NG, NS<sub>1,4</sub> pāṇḍara-  
 117) NG abhijit; NS<sub>1</sub> abhiji.  
 118) NG ca ratna-; AS<sub>1</sub> cala-.  
 119) NG -paridhānāḥ.  
 120) NG vajrāṅkuśi.  
 121) NG, NS<sub>2-3</sub> -dhūpā-; NS<sub>1</sub> *omits* -rūpā-.  
 122) NG *omits* -āyur-; NS<sub>1</sub> -parvavaśitā; NS<sub>2-3</sub> -pūrvaśitrayeyo; NS<sub>4</sub> -pūrvaśitāyamyo.  
 123) NG om aḥ; NS<sub>2-3</sub> am āḥ; AS<sub>1-2</sub> a ā.

## 補 遺

### 『完成せるヨーガの環』

#### 第19章「金剛界マンダラ」訳・註（十六大菩薩）

#### 凡 例

- ① 和訳に際しては NG [BHATTACHARYYA 1972: 44-47] をサンスクリット・テキストの底本とし、NS<sub>1</sub>45a, 3-50b, 2; NS<sub>2</sub>64b, 3-69b, 3; NS<sub>3</sub>53a, 2-58a, 3; NS<sub>4</sub>50b, 1-54b, 1 を参照した。以下にあげたのは、このうち十六大菩薩の部分である。
- ② チベット訳テキストは NT<sub>1</sub>138, 3, 3-139, 4, 2; NT<sub>2</sub>1216, 1-1220, 6; NT<sub>3</sub>thu137a, 6-140a, 1, および NT<sub>4</sub>61, 1, 6-62, 2, 3 を参照した。
- ③ AS<sub>1</sub>217, 8-223, 7; AS<sub>2</sub>132a, 7-135b, 7 を参照した。チベット訳該当箇所 AT<sub>1</sub> 269, 4, 8-270, 5, 5 もあわせて参照した。
- ④ これ以外は、第21章に準じる。

#### 訳

東の蓮弁には<sup>1)</sup> 金剛薩埵がいる。身色は白、右手の中指で胸を指しながら金剛杵を持つ。左の金剛の拳は大腿に置き、立派な鈴を持つ。

南には<sup>2)</sup> 金剛王がいる。身色は黄色、右手にある金剛鉤で鉤召のしぐさをとり、左手には羂索を持つ。両手で握る鉤で鉤召のしぐさをとるとい説もある<sup>3)</sup>。

北には<sup>4)</sup> 金剛愛がいる。身色は赤で左右の手で弓矢を持つ。

西には<sup>5)</sup> 金剛喜がいる。身色は緑宝のような色。金剛杵を持った両手で胸の前で賞賛を与えるしぐさをする。

東の蓮弁には金剛宝がいる。身色は黄色、右の金剛の拳<sup>6)</sup> で両端に金剛杵のついた宝の華鬘<sup>7)</sup> を自分の灌頂の位置<sup>8)</sup> で握り、左手には金剛鈴をほこらしげに持つ<sup>9)</sup>。

南には金剛光がいる。身色は赤、両手に持った太陽で照らす。

北には金剛幢がいる。身色は緑<sup>10)</sup>、両手で握る如意宝幢を左肩に置いて示す<sup>11)</sup>。

西には金剛笑がいる。身色は白、右手には歯をつないだ輪がついた金剛杵を握り、左手でも同様に歯をつないだふたつの輪がついたふたつの金剛杵を顔の前に保つ<sup>12)</sup>。

東の蓮弁に金剛法<sup>13)</sup> がいる。身色は白みをおびた赤、左手で蓮華の茎をほこらしげに握り、右手でその花を開かせる。

南には金剛利がいる。身色は空のような青色<sup>14)</sup>、左手で般若経の経函を胸の前に持ち、右手で剣をふりあげて保つ<sup>15)</sup>。

北には金剛因がいる。身色は金色、左手にのせた八輻輪を右手の中指で火炎輪のように回す、という転法輪印を示す<sup>16)</sup>。

西には金剛語<sup>17)</sup>がいる。身色は赤、左手で法のほら貝を持ち、右手で独鈷杵の先端を握る<sup>18)</sup>。

東の蓮弁には金剛業がいる。身色は緑<sup>19)</sup>、右手で十二鈷金剛杵を<sup>20)</sup>胸の前で鉤召のしぐさで持ち、左手で二重金剛のついた鈴をほこらしげに持つ<sup>21)</sup>。あるいは、両手の先<sup>22)</sup>を合わせて二重金剛杵を頭上に<sup>23)</sup>持つ。

南には金剛護がいる。身色は黄色<sup>24)</sup>、両手で金剛の甲冑を握る。

北には金剛牙がいる。身色は黒、両手の小指を金剛の牙の形にして、自分の顔の前に保ち<sup>25)</sup>、悪しきものたちを威嚇する。

西には金剛拳がいる、身色は黄色、金剛で身を固める、金剛の拳で五鈷杵を握り脅かす<sup>26)</sup>。

## 訳 註

1) AT<sub>1</sub>: 'dab ma rnam la mdun du (蓮弁の前には)。

2) AT<sub>1</sub>: g'yas su (右には)。

3) GGN 193, 1, 4: 鉤で鉤召のしぐさをとる。

4) AT<sub>1</sub>: g'yon du (左には)。

5) AT<sub>1</sub>: rgyab du (後ろには)。

6) AT<sub>1</sub>: rdo rje dang bcas pa'i khu tshul (金剛杵を持った拳)。

7) GGN193, 1, 5: 灌頂の華鬘。

8) NT<sub>4</sub> は「自分の」の対応語を欠く。具体的には額を指すと考えられる。

9) NT<sub>1</sub>: dkul brten pa'o (脇に置く)。GGN は「左手には...持つ」を欠く。

10) GGN193, 1, 6: 紺。

11) Tib. はテキストによって解釈が異なる。NT<sub>1-3</sub>: g'yon gyi bar du lhur gnas pa'i phyag gnyis kyis yid bzhin gyi nor bu'i rgyal mtshan 'dzin cin 'phyar ba'o (左側に置いた二臂で如意宝幢を握り懸ける); NT<sub>4</sub>: g'yon gyi phyogs na gnas pa'i phyag gnyis yid bzhin gyi nor bus mtshan pa'i rgyal mtshan 'phyar ba'o (左の方に置いた二臂 [で] 如意宝のついた幢を懸ける); AT<sub>1</sub>: phyag gnyis kyis yid bzhin gyi nor bu'i rgyal mtshan 'dzin zhing g'yon gyi dpung pa'i gnas su 'phyar ba'o (二臂で如意宝幢を握り左の肩に懸ける)。GGN は「左肩において」を欠く。

- 12) 金剛笑の持物は ACR と NPY の間で違いがみられる。AS: *savyetarakarābhyām dantapank-tiyuktavajradvayam grhītvā 'sye niveśayati* (左右の手で、歯でつながれたふたつの金剛杵を握り顔に置く)。従って、NPY では左右の手で合計三つの金剛杵を持ち、顔に置くのはそのうちの左手のふたつであったが、ACR の場合、左右の手にひとつずつ金剛杵を顔の前に持ち、その間を歯が並ぶことになる。GGN 193, 1, 7: 二列に並ぶ歯のついたふたつの金剛杵を持つ。
- 13) NT<sub>4</sub>: *rdo rje rin po che* (金剛宝)。
- 14) NT<sub>4</sub>: *sngon po* (青)。GGN 193, 2, 1: サフランの花の色。
- 15) NT<sub>4</sub>: *ral gyi [gri?] phyar ba'o* (剣を振りあげる)。
- 16) Tib. はテキストによって解釈が異なる。NT<sub>1-3</sub>: *mgal me lta bu bskor zhing chos kyi 'khor lo'i phyag rgya 'dzin pa'o* (灯明のごとき [輪を] 回し、転法輪印を結ぶ); NT<sub>4</sub>: *mgal me lta bur bskor zhing chos kyi 'khor lo'i phyag rgya 'dzin pa'o* (灯明のごとく [輪を] 回し、転法輪印を結ぶ); AT<sub>1</sub>: *mgal me'i 'khor lo phyag rgya 'dzin pa'o* (灯明の輪の印を結ぶ)。GGN は単に「転法輪印を結ぶ」とする (193, 2, 1-2)。
- 17) NT<sub>1</sub>: *rdo rje bsrung ba* (金剛護)。
- 18) Tib. は NPY と ACR の間で解釈が異なる。NT: *rdo rje ltse gcig pa'i ltse* [NT<sub>4</sub> は *ltse mo*] *'dzin pa'o* (一鉈杵の先を握る); AT<sub>1</sub>: *rdo rje ltse gcig pa lta bu'i ltse 'dzin pa'o* (一鉈杵のような先端を握る)。GGN 193, 2, 2: 指を立てる。
- 19) NS<sub>1</sub>: *raktaḥ* (赤)。
- 20) NS<sub>1</sub> には「金剛杵を」から「左手で二重」の該当部分が欠落している。
- 21) NT<sub>1</sub>: *dkur brten ba* (脇に置く); NT<sub>4</sub>: *skur brten pa'o* (体に置くのである); AT<sub>1</sub>: *dkur brten ba ste* (脇に置くのであって)。
- 22) Skt. の *kapota* が手のどの部分を指す語であるのか明らかではないが、NT<sub>1-3</sub>, AT<sub>1</sub>: *thal mo spyi bor* より「手の先」と解釈する。NT<sub>4</sub> は *kapota* に対応する語を欠く。
- 23) AT<sub>1</sub> は「頭上で」に対応する語を欠く。GGN 193, 2, 3: 両手に三鉈金剛杵を持ち、如来たちへの供養のために舞う; GDK 459, 5-6: 両手にふたつの三鉈金剛杵を持ち、如来たちへの供養のために舞う。
- 24) NT<sub>4</sub>: *ser mo* (黄色 [語尾が女性形 *mo* である])。
- 25) AT<sub>1</sub>: *zhal gyi grwar* (顔の端に)。
- 26) Tib. の金剛拳の記述はテキストによって解釈が異なる。NT<sub>1-3</sub> はほぼ Skt. に一致する。NT<sub>4</sub> は「身色は黄色...身を固める」の対応箇所を欠く。後半部分は NT<sub>1-3</sub> にほぼ一致する。AT<sub>1</sub>: *rgyab tu rdo rje khu tshur gyi tshams su rdo rje ste rdo rje khu tshur dag gis 'tsher ba'i rdo rje lnga gzun pa'o* (後ろにいる金剛拳は [体の] はしまで金剛で覆われ、両方の金剛の拳によって恐ろしい五鉈杵を握るのである)。GGN 193, 2, 5: 身色は白、金剛杵をもつ。